
名前の無い小説群

のみのみの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名前の無い小説群

【Nコード】

N9555H

【作者名】

のみのみの

【あらすじ】

始まりの物語、既に始まってしまった物語、終わってしまう物語。そんな、中途半端な物語たちだけが存在しない、一話完結超短編小説群。600〜1000字程度。お題配布サイト「はちみつトースト（管理人：小林夏樹様、<http://honey0toast.web.fc2.com/>）」掲載のお題で作らせていただいています。尚、文中に真面目腐った科学的な説明文が所々存在しますが、その説明が間違っている場合もありますので、鵜呑みにしないでください。・・・気付いたのですが、一人だけフルネームが出

ていました。気がしないんですけど。

0001 相容れない存在

私と彼は、世に言う幼馴染だ。

あくまで世に言う。実際の所、私は、多分彼もだが、幼馴染とは思っていない。腐れ縁のほうがしっくりくる。

幼馴染、と言われると、彼も私も、苦い顔をする。

そもそも、家が近い訳でも同じ学校に通っている訳でも、ましてや生活領域が近い訳でもなかった。ただ、運命の悪戯だったのだ。

「ああ、おまえか」

彼は私の事を、おまえ、と呼ぶ。

「何でまたいるのよ」

私は彼の事と呼んだことは無い。

いつものジーンズと変な絵がプリントされたTシャツ。その上から革製の高そうなジャンパー。髪の毛は茶色で、耳にピアスでもしていそうな風貌だ。

対する私は、これまたいつもの地味な黒いパンツとベージュのシャツ、その上から茶色のカーディガンを羽織っている。髪の毛は黒。腰の辺りまで伸ばしているのは、某ドラマの影響だ。

「そっちこそ」

いつもの場所、いつもの格好、そしていつもの会話。

いつからこのルーチンを繰り返してきたのだろうか。

彼は体重を預けていた壁から離れ、そして私から離れるように歩いていく。

「なんでそっちに行くの」

聞くと、彼は立ち止って振り向かずに答える。

「用があるからに決まってるだろ」

「私もそっちなんだけど」

「そうか」

会話はそれで終わる。

なぜか彼は私が隣まで来るのを待ってから、私の横に並んで歩き始める。

彼の長い脚と私の短い脚。歩調が合うはずが無いのに。

なんでだろう。

何度そう思ったことが。

答えは分かっているはずなのに、なぜかそれを思い浮かべることができない。

私をこうやって困らせる彼は、嫌いだ。

「じゃあな」

彼はしばらくするとそうやって私から離れていく。

やっぱり彼は、嫌いだ。

0002私のおきを見せてあげる

とっておき。

つまり十八番とか、一番得意な、とかいう意味だ。が、とっておきは文字通り取っておくべきだったと後になって後悔することは、よくあることかもしれない。

「私のおきを見せてあげる」

そう言い出したのは誰だっただろうか。

教室の前の、黒板の前の、教壇の上に立った彼女は、光加減によつては茶色にも見える黒い髪を腰の辺りまで伸ばしている。

窓から吹く風がその髪を揺らし、教室は静寂に包まれた。

唇が小さく動く。

歌っているように見える、自然な、でもどこか不自然な行為。

「

彼女が大きな声で何かを言った気がした。

でも僕は、休み時間なのに学校がここまで静かになるのだろうか、と不思議に思っていたために何て言ったのかは分からなかった。

舞い上がっていた彼女の髪の毛が、ふわりと元の位置に戻る。

何が起こったのか分かった人はどれ位いたのだろうか。

教卓の上に置かれたものに全員の視線がいく。

壺。

そう呼ばれる入れ物だ。

ざっと見た感じ、室町か鎌倉あたりの時代の物のように見える。

茶色と緑色の中間の色が、水の波のように描かれている。

ピキッ

最初は、誰かが呟いたのかと思った。

だが、その音は次第に大きくなっていき、音の発生元がはっきりとした。

壺だ。

教壇の上に立っている彼女は見るからに慌てた。

そして、壺を持ち上げた、その瞬間。

ガッシャーーン

取って置くべきだったのにな。

そう僕が思ったのは、大分後になってからだった。

0003 未来を切り開く

「未×2+8っていうことね」

そう言われても何のことかは分からなかった。

「どついう意味なの？」

「未来を切り開くを実践してみたの」

それ以上説明する気が無いみたいで、彼女はいつもの頬笑みを顔に貼りつかせている。

「みらいをきりひらく。みかけるにたすはち。アナグラムかな？」

「字数は合ってるけど、違うと思うよ」

「だよね」

間違っているとは分かっていた。言ってみただけ。

「未来を切り開く。未来を、ね。分解すればいい訳か」

「そうそう。それで合ってるよ」

「なるほどね〜って、そうじゃなくてさ。未来を切り開くにはどうすればいいのか、って聞いたのよ」

彼女は、うーんと言って目を閉じる。

もう一度うーんと言って目を開け。

もう一度うーんと言って目を閉じ。

それを何度か繰り返し返して、最終的にこう言った。

「日本語の意味、分かってる？」

どういついみじゃ〜!

っと叫んでしまいそうになる。ああ、だめだ。私のキャラクターが崩れるよ〜。

深呼吸をして、落ち着いて、答える。

「分かってます。生粋の日本人ですから」

「そう。なら、矛盾していることも、分かってる?」

「矛盾?」

未来を切り開く、未来を切り開く。

えっと、使われている単語は、未来と切り開くの二つ。

「矛盾、というか、意味の重複、かな?」

そう彼女は言い直した。

未来。切り開く。

つまり。

「未来は、勝手に切り開かれるもので、切り開くことは出来ない、ということ?」

「そうそう。そうよ」

「そんなの納得できないよ」

彼女はうーんと呟くと、こう言った。

「私は未来は自然と作られる物だと思うから、切り開き方なんて知らないの。自分で考えた方が早いかもしれないよ」

自分で考えられなかったから聞いたのに。

イジワル。

「まあでも」

「まあでも？」

何か別の方法があるのか、と期待をよせてみた。

「そもそも未来なんて想像の産物だからね」

よせた私がバカだった。

0004ハロー、神様

「は、ハロー、神様」

僕は目の前に立つ人(?)に対して、そう言いました。
日本語、通じるかな？

「……」

無反応？

えっ、無反応ですか？

いや、そりゃあ学校では影の薄い存在でしたけど、目の前にいる人物が声を(精一杯)かけているのに無反応。
正直、自信、失くします。

目の前に立つ人(?)の容姿は、それはまるで神様のようです。

高い背、黄金色の輝く足下まで届きそうな髪、瞳の色はこれまた黄金。服装は白一色。袈裟のようなもののようにです。肌も真っ白で、服と肌の境目が分かりにくくなっています。

後光のようなものも見えて、それで更に体や服の輪郭がぼやけま
す。裸足です。寒そうですね。

顔は。よく見えません。

「ハロー。こんにちはー。ぼんじゅーる。アンニョンハセヨ？ グ
ーテンターク。にーはお？ ズトラーストヴィ。ブエノスディアス」

えっと、他には他には他には。

「あ……… / / /」

ん？

さつと顔を見ると、目の前に立つ人（？）の口元が動いているのが見えます。

でも、あ以降何も聞こえてきません。

「何ですか？」

顔が見えない目の前に立つ人（？）に向かって、声をかけます。その目の前に立つ人（？）が一瞬、微笑んだように感じました。その行為に首を傾げ、もう一度尋ねます。

「なんです、か？」

静寂が世界を支配しているように感じました。

目の前に立つ人（？）の口の動きが止まり、その顔が上に向けられ。

ん？ 上？

ゴッガーン

僕が最後に見た光景は、たらいの裏面でした。

0005 聖靈降臨祭

いってー。何だよ。

そう思っ上を向こうとしたが、それは無理だと分かってた。今上を向いたら、正面で行われていることが無に帰す。

そうなら、俺は殺される。

それは、絶対ヤダ。

正面には透明な、目に見えないはずだがそこに有ると分かるマナが、大量に集まって球体を形成している。

他の五人の術師と共に形成されたこれは、今日の祭り『聖靈降臨祭』のメインイベントだ。

遙か昔、この街にやってきたという大魔術師が、当時いたという魔族に対抗するために精霊降臨の儀式を行ったという。

その成果で魔族はいなくなり、世界は次第に平穏に包まれていった。

彼、彼女かもしれないが、に敬意を表して、この街では大魔術師が精霊降臨をしたとされる日に『精霊降臨祭』を行うようになった、と言われている。精霊は、いつの間にか宗教と結びついて聖霊降臨と混同され、『聖霊降臨祭』と書かれるようになったという。

そしてその精霊降臨の儀式を模したのがこのメインイベント。

精霊とはマナの集合体に意思が宿ったものと考えられているため、こうやってマナを集めれば精霊が出来ると考えられている。実際に行われた精霊降臨の儀式は記録にも記憶にも残っていないし、今までに精霊が出てきた例がないため、これで本当に精霊が降臨するのかが分かっていないので、単なるマナの無駄遣いだと俺は思う。

マナ濃度が一段と濃くなったのか、塵気楼か何かのように空間が歪んで見え始めた。

臨界点？

突然そんな言葉が浮かんできて、瞬間的に力を弱めた、その時だった。

マナの球体に映る世界が歪み切り、色が変わり、そして一瞬にして元の空間に戻った。

球体に弾かれた俺達六人は、円形のステージの端に座り込み、球体のあつた場所を見る。

そしてその真中に居たのは。

「ほわ〜。寝る」

妖精、という生物を知っているだろうか。

身長の小さい人に羽を付ければ妖精の出来上がりだが、真中に居たのはそんな妖精だった。全身が白から緑の色だけで成り立っていて、どこかその姿は霞んでいる。

妖精が精霊、とでも言うのか。

床に降り、羽を畳んで堂々と寝るその姿に、長い間俺も含めた大勢の人は見入っていた。

0006 相思草（前書き）

喫煙はとっても不健康です。

0006 相思草

つつい思い浮かべてしまったために相思草と呼ばれたり、あるいは姿形が似ていたために莨と書かれたりする植物がある。つまりタバコのことだ。

つまり、タバコは俺たち恋人同士にとっては、縁起のいい物なんだけ。

「分かったか？」

「知らないわよそんなこと！」

スパコーン

本当にそんな音が出るとは知らなかった。

朦朧とする意識の中、俺は嫌悪を露わにした彼女の顔を微笑んで見ていた。

「キモ」

最後に聞こえた言葉は、そんな言葉だった。

目を開けると、馴染みの天井が見えた。

「もう起きたの？」

溜め息が聞こえてきそうな、耳に馴染んだ声が聞こえてきた。

「ああ、起きたぞ」

そう言っただけ俺は上半身を起さず。
6畳ほどの小さい自分の部屋にある唯一の椅子。そこに彼女が座っている。

視線を動かすと、火の点けられていないタバコの山が部屋の隅にできていた。隠していたのにな。

「おじゃましまーっす」
「お邪魔、します」

何で寝ていたのかを考えていると、この狭い部屋に二人が入ってきた。

一人は背が高いうえに幅も広いむさ苦しい男。もう一人は小柄でメガネをかけた女。
確か名前は。

「やっと来たわね。遅いわよ、二人とも。こいつ、もう起きちゃった」

椅子に座っている彼女が二人に向かって言う。

「そっか。それは残念だ」
「ちよつと二人とも、止めた方がいいよ」

むさ苦しい男が悔しそうな顔をして、その後ろに隠れるようにいる小柄な女は小さな声で物騒なことを言う二人を諷める。

「おまえら、何をしようとしていた？」

聞いたが、彼女もむさ苦しい男も笑顔ではぐらかす。

小柄な女に目を向けると、おずおずと話しました。
いつもの光景である、と。

0007 愛想笑いばかり上手くなってどうするの？

「それじゃあ、留守番お願いね」

豪華なドレス（赤）を着た相手Aが言う。

「勝手に抜け出したら、どうなるかは分かってるわよね？」

豪華なドレス（黄）を着た相手Bが凄みをきかせる。

豪華なドレス（水）を着た相手Cもそれに同調していた。

「じゃはは」

それに対して地味なドレス（灰）を着た私は口を半開きにして苦笑する。しかし、本来ならば聞こえるか聞こえないかのこの苦笑も、今の状況では大音量にならざるを得ない。

「変に笑ってないで、スマイルっ！」

にっ、と笑うと、Bは満足いったのか一つ頷いた。

「そうそう。それでいいのよ。最初からそうしていなさいな」

Cが長い鬘を揺らしながらそう言う。

「それじゃあ、お客さんが来たら、ちゃんと接待するのよ。いいわね」

Aが傲慢にそう言うのと、さっさと歩いて行った。他のBとCも続

く。

私はここで溜め息を一つ吐いた。

「愛想笑いばかり上手くなってどうするの？」

コンコン

そんな音が聞こえてきたのは、大分経ってからだ。
遅い。

つついそう言いそうになるが我慢する。

「いらっしま

私の言葉は途中で止まる。
目の前にいた人物は。

「おおおおお、おおおじ様?!」

「いや、私は君の大おじ様ではない、だろうね」

「しし、失礼しました、王子様。ど、どうぞこちらへ」

そういつて、その地味な服装をした王子様を招き入れながら深呼吸
吸をする。

精一杯の落ち着いた声と、愛想笑いを顔に張り付けて。

「どうぞ、お座りください」

そう言つと、王子様はこう言った。

「笑顔が素敵だね」

私はその台本にない台詞を聞いて、愛想笑いも役に立つんだ、と
思った。

0008君の周りには、いつも誰がいる

幽霊、という物を信じるだろうか。

正直言って、当時の僕は信じることも信じないこともできなかった。

だって、幽霊の定義自体、曖昧なものだから。

あ、あと、幽霊とオバケの区別の仕方とかは、今も知らない。

「君の周りには、いつも誰がいる」

唐突にそう言ってきたのは、オカルト研究会という同好会に所属している、クラスでも変わり者の一人だった。

「どづいこと？」

一応興味があったので訊いてみる。

「そのままの意味だ」

そう言って、その変わり者は去って行った。
なんだったのだろう。

翌日。

朝起きると同時に、囁き声が聞こえてきた。

「ねえねえ、こっち向いてよ」

声の方を向くと、誰もいなかった。

首を傾げたが何も変わらない風景に、更に首を傾げた。

朝食を食べ、学校に向かう途中にもまた別の掠れた声が聞こえてきた。

「大丈夫？ 大丈夫？」

どこか不安そうなその声の方を向いたが、誰もいない。

教室に着いて、なんとなく昨日の変わり者の一言が気になって視線で彼を探すが、教室にはいなかった。

その日を境に、誰もいない所から声が聞こえてくるようになった。その声は日を追うことにはつきりと、また絶えず聞こえてくるようになった。

始めは色々な声があつて色々なことを言っていくので、興味深くもあつた。

だが次第にこの鳴り止まない声に苛立ちを覚えるようになった。

返事をして、言い返しても、何も変わる事はなく、でもその声は少し哀しそうなものに変わる。

それに更に苛立ちを覚えるのだ。

そのうちに、僕はその声達に対して何も言い返さなくなっていた。

僕は高校を卒業すると同時に、旅に出た。

バイトをしながら、全国を回った。

声は、その地方の言葉で喋る。その事に気付いて、変わり者の一言を久しぶりに思い出した。

「僕の周りには、いつも誰かいる」

僕はやっと信じることにした。

幽霊の存在を。

0009 愛人じゃ、嫌

敬天愛人。

その言葉がしっくりくるほど、彼は誰にでも優しい。

愛人という言葉は人を愛する、つまり人を大切にするという意味も持っている。敬天の方はよく知らないが、彼の長所を挙げるとすれば、十人中十人が愛人という単語に納得するだろう。

だが、短所として愛人を挙げて、十人中十人が納得するだろう。それだけ彼は優しすぎるのだ。

「愛人じゃ、嫌。恋人になつて」

そう言ったのはいつの事だっただろうか。

それを聞いた彼は、いつもの笑顔で首を振るところ言った。

「ごめんね。僕は君の恋人だよ。それは間違いのないことだよ。でも、僕は見て見ぬ振りにはできないんだよ。ごめんね」

途中から泣きそうな顔になった彼に、あの時の私は笑って彼を抱きしめてあげた。

「いいよ。謝らなくても」

その後しばらく胸の中で、まるで泣いたことが無いかのようになり、不器用に彼は泣き続けた。

それは、風の噂だった。

彼は、元は暴走族だったんだよ。

私と彼の関係は、恋人以上、夫婦未満の関係が続いていた。そんな最中に聞いた、本当に風の噂と呼べるような、些細な話だった。

確かに彼は体力もあるし、筋力もある。だけど、私は笑っていた。もしそれが本当だったとしても、彼は私の恋人だから。

「僕は、昔ね。暴走族のリーダーだったんだ」

そう言った彼の瞳は、何かに脅えているようでもあり、反対に昔の夢を思い浮かべて懐かしんでいるようでもあった。

「この手で、人を殺してしまっただよ」

私は、彼がごめんねという前に、不器用に泣き出した彼を抱きしめてあげた。

0010一番を目指してるの。だからそれ以外はダメよ。

ナンバーワンよりオンリーワン。

いつだったか、そんな歌詞の歌が流行ったことがある。

でもオンリーワンが誰でもなれる、いや違う。誰でもなっているのならば、オンリーワンになる意義というものがなくなる。

当然のことだ。誰もがオンリーワンではなくてナンバーワンを目指す。いや、正確には違うか。オンリーワンの中のナンバーワンを目指すだろう。

だが、彼女はそんな他愛もない事を目指してはいなかった。

それは彼女の容姿、成績、趣味、言動、友好関係などを見れば明らかで、そしてさっきの発言を聞けばそれは確信するだろう。

私、一番を目指してるの。だからそれ以外はダメよ。

何週か前に行われた模擬試験。その結果を見た彼女の友達の間質問に対する答えだ。

その結果は、というと、全教科満点。

一年生最初の模試で緊張していた生徒も多かったと思うのだが、彼女は当然といった表情でその成績表を眺め、そして乱暴気味に鞆にしまおうとしたところで友達に見つかったのだ。

定期試験で常に学年5位前後を維持していた僕ですら、上位10%に入るか入らないかの成績なのに。

ちらと彼女を見ると、短い髪を八つ当たり気味に掻き毟っていた。それだけの行為なのに、何ともシニールに見える。まあ、慣れてしまえばそんなことはない。

鞆を取り、友達から紙をひたたくって鞆に詰める。そして誰にも視線を合わせることなく教室を出ていった。

数年後。

彼女の名前を知らないものはいないと言っただけに、彼女は有名になっただけ。

「失礼します」

首都の中心に豪邸を構える彼女。

僕はそこを訪れた。

「入っていいわよ」

久しぶりに聞いた彼女の声に、僕は自分の考えが間違っていない可能性が高まったと感じた。

扉を開けて、中に入る。

そこにはテレビなどで見る彼女しか知らない人間は卒倒するだろう光景が広がっていた。

高校の時一緒だった僕はそうではなかったが。

「お久しぶりです」

「久しぶりね」

彼女はいつかと変わらない声で、僕にそう言った。

「君は、僕の一番だよ。……多分」

突然言われた言葉に彼女は珍しく動揺したようだったが、ニカッと笑うところ言い返してきた。

「多分ってなにさ。多分って。でも、初めてだよ。そんなこと言われたの。ありがとな」

0011そんな風に笑うとよく似てるわ あの人に。

そんな風に笑うとよく似てるわ あの人に。

突如として言われた言葉に、部屋の空気が穏やかなものに変わっていく。それでも立場上、ピリピリせざるを得ないが、随分とマシになった。

赤茶けた部屋。壁や床、天井など一面、まるで洞窟のようにごつごつしているが、お城の中でも一番偉い人のいる部屋だ。

目の前にいる人物は、黒い髪と瞳を持った、一見人のように見える。その呼び名は『魔王』だ。

その周りにいたはずの魔物は、既に『勇者』こと俺の仲間によってことごとく倒されていた。

剣士である俺に、弓師、黒魔法師、白魔法師、それと魔術使いの五人でここまでやってきた。そして今、ついに最終目標を達成しようとしている。

ちなみに、俺は『魔王』の前で笑った覚えはない。以前に一度、とある村で仲良くなった少女に

俺の目は、驚愕によって見開かれた。

その様子を見た仲間達は訝しんだが、そんな事には構っていられない。

「君は、もしかして」

続けて少女の名前を言おうとするが、『魔王』はそれを左手を振ることで遮った。

一気に部屋のマナ濃度が増加し、俺達五人は発生した風によってことごとく吹き飛ばされる。

「気付かなかったのか。残念だ」

そう言って溜め息を吐いた『魔王』は、少女とは似ても似つかなかった。ただこの世界では珍しい、黒髪と黒瞳を持つこと、そしてその体付きだけが一緒だった。

村であった少女は自分の容姿を憂いていて、俺はそれを励まして、ただそれだけの関係だ。

そのはずだと思ったのに。

「だがまあ、気付けなくても当然か。あの人もそうだったが」
「あの人って、誰だ！」

岩に腰や足が当たって痛い、この程度は余裕だ。

俺はずっと前から、少女と初めて会った時から、聞きたかったことを聞いた。

それを聞いた『魔王』は目を細める。その姿はまるで、我が子を見るような

「…つつ」

弓師が嫌悪の目付きで『魔王』を仕留めていた。

0012わたしのたいせつなひと。

誰かが話しかけてくる。

俺の仲間だろうか。目を閉じているのでよく分からない。

頬を叩かれ、やっとの思いで目を開けた。

そこは赤茶けた広々とした部屋だ。俺は、何でここに？

首を回して、今の状況を確認する。

白魔法師の彼女は隅で祈っていた。魔武道使いの彼は唯一の出入口で仁王立ちしている。弓師の彼は嫌悪の表情で俺の後ろを睨んでいた。

後ろを振り返る。

そこには、山のような魔物の死骸。そして中央に鎮座した赤茶けた椅子の上には、胸に矢の刺さった少女の死体があった。

「……あの少女は、だれ？」

「それはこっちが聞きたいわよ！」

ぼそつと呟いた言葉に過剰に反応したのは、黒魔法師の彼女だった。俺の目の前にしゃがみ込んでいる。

わたしのたいせつなひと。

俺は記憶を探り、そして思い出した。

とある村で出会った少女。そしてさっきまで『魔王』と名乗っていた少女。

弓師が会話を遮るように弓を放ち、少女を死に至らしめた。

「わたしの……」

黒魔法師の彼女が、目をいっぱいに見開いて後ずさる。
俺は『勇者』だ。今まで『魔王』を倒すために努力してきた。
だったら『魔王』は？

わたしのたいせつなひと。

最期に見せた、まるで我が子を見るような眼を思い出す。

『魔王』は、いや少女は倒されるために、俺に関わったのだろうか。

少女の気持ちを知りたい。

知りたい。

そのためだったら、俺は『魔王』になってもいいよ。

わたしのたいせつなひと。

0013なんだ、意外と呆気ない

『機、出動！』

宇宙母艦トライから、まるで線香（閃光ではない）のようにもや
つと飛び出した、というより這い出した　　機は、ノッソノッ
ソと無重力空間を進む。

『なにやってるのっよ！！！！』

耳元から聞こえてくる声。

それを俺は、もちろん無視する。

大分前に広がる戦闘領域には、味方と敵の機体があっちへ飛びこ
っちへ飛びびしている。

面倒だ。

『勝たないと、減給するわよ』

それは困る。

俺は全速力で戦闘領域に突っ込んでいった。

無人機と有人機の入り混じった戦闘。

素人には機械的な動きと意思を持った動きの二つに翻弄され、意
外と戦いにくい。だが、俺は玄人だ。

「なんだ、意外と呆気ない」

そんな事を呟きながら、敵を殲滅していく。
そういえば、俺もこんなに弱い時期があったな。

そんな邂逅に浸る暇を敵は与えてくれず、早速四方八方からレーザー光線が襲いかかってきた。

俺はそれらを易々と掻い潜り、そして一閃。
たったそれだけで、周囲の敵を一掃した。

無人機と有人機の入り混じった戦闘。

その中でも特に目を引く敵の機体が幾つかあった。そこに向かって一直線に飛んでいき、ブレードで両断した。

「なんだ、意外と呆気ない」

そんなことを呟きながら、俺は敵を殲滅していく。

そういえば、俺にも弱い時期があったな。

そんな思考が自分らしくない、と思い直し、敵の殲滅に全力を注ぐ。

特に味方が苦戦している相手のもとに。

無人機と有人機の入り混じった戦闘。

味方の中でも優秀なパイロットが数機の敵によって次々と倒されていく。

「なんだ、意外と呆気ない」

そんな事を呟きながら、その強いと思っていた敵を一刀両断して

いく。

そういえば、俺もこんな時期があったな。

そう思いながら、同時に温情を一切捨てて敵を殲滅していく。

状況は一進一退のまま、戦力は切り崩されていった。

0014 それでも何も変わらない

ん、困ってしまった。

目の前の床にはレバーが、壁にはボタンが、天井からはロープが、沢山ある。数えきれないくらいに、だ。

大半が、いやどれか一つを除いた全てがトラップだろう。

これは気を引き締めなければ。

.....

よし。それじゃあまずは手近なボタンから。

ポチっとな。

.....

何も起きない。

うん。それならそれでいいんだ。次に移ろう。

今度はロープを引っ張る。

.....

この場所は静寂に包まれている。

うん。まあ何も出てこないに越したことはない。次だ次。

床にしゃがみ込み、レバーを引く。

.....

ガシャン、という音がしたが、これはレバーの音だ。

それ以外は特にこれといったことは起きない。

ま、まあ、運がいいのだろう。前向き前向き。

ロープを引いてみたり、

ボタンを押してみたり、

レバーを引いてみたり。

それでも何も変わらない。

僕はそんな単調作業を続けた。

ほとんどのトラップを処理し終えて、僕は何か違和感を感じた。それでも、何回も続けてきた単調作業を止めるほどには至らず、手足を動かし続ける。

残り3つ。

残り2つ。

最後はレバーだった。

これで終わりだ。

そう思ってレバーを引いた。

.....

なにも起きていないことを確認して、僕はほっと溜息を吐いた。そこで、ハタと気づいた。

これは単なる時間を消費するための部屋ではないのか、と。

あゝ。無駄なことをしたわけだ。

僕は盛大な溜め息を吐いた。

と。

それと同時に、地響きが始まり、立っていられなくなった。

片膝を付いて片腕で上半身を支える。少し不自然な体勢になるが、姿勢を変えることもできない。

しばらくしてから揺れが収まる。

立ち上がって、手と膝に付いた泥を払うと、視線を中央に向けた。

そこには、このダンジョンのボスがいた。

骨折り損にならなくてよかったな。

そう思いながら、そのボスに剣をもって切りかかっていった。

0015 今日も世界は進んでいく

空中都市。

ここに住む種族は定住を好まない。

そのために、空中に浮かぶいくつもの大陸を渡り歩いてきた。

そして今日、都市を捨てて、新しい大陸に移動する。

「皆、準備はよろしいかな？」

白髪に白髭。それらは伸びきり、地面に着かんとしている。

彼は空中都市の、いや正確にはこの種族の長だ。

もう何度も繰り返してきたこと。

移りたい人が移り、そうでない人は留まる。

「それでは、行こうか」

二つの大陸が接触している僅かな時間。

その間に、全員の移動を完了させなければならぬ。

まずは子どもと老人。そして女。それから男が移り、最後に長が移った。

「ではな。新たなる世界で」

「ああ、長も。新たなる世界で」

別々の大陸に足を付けた、長と屈強な男は、短い挨拶をする。

それは、この種族のおまじないの言葉。

新しい世界も、平穏でありますように。

新しい大陸での生活。

それまでの生活が一変するが、それも最初の数週間のみだ。

落ち着けばまたいつもの生活が戻ってきて、そして別の大陸が近づいてきたら移動をする。

そんな生活。

時々そこに以前から住んでいた住民と一緒にいる事がある。そこで、子孫を繁栄させる。

ずっと旅を続け、様々な世界を見、そしてそれを伝える。それが彼らの日常。

どこかで彼らは世界を移動する。

そうやって今日も世界は進んでいく。

0016 Rabbi

「どうぞ」

扉を叩く音に目覚めさせられ、不機嫌そうな老人がそう言った。

「ラビ殿にお話があつて参りました」

入ってきた青年はそう言ったが、ラビと呼ばれた老人は一層不機嫌になった。

「他にどんな用事があるのじゃ。儂を殺すか？」

「いえいえ、滅相もございません」

「ふん。まあよい。どんな用事じゃ」

「はい。これを」

青年は懐から一通の手紙を差し出した。

それを受け取ったラビは一瞬で目を通すと、一つ溜め息を吐いた。

「儂の弟子を頼れと申すに」

「ですが王はラビ殿を、と」

「仕方がないかの。久し振りにあやつの顔でも見るとするか」

「ラビ、久し振りだな」

「王もご機嫌麗しゅう」

「ラビ、かしこまらんでよい。いつもの様にせい」

「ならば甘える事に致すぞ」

王とラビの間には、一つの将棋盤が置いてある。

「今日は将棋で儂と勝負したい、と申しておったの」

「ラビ、その通りよ。余と手合わせを願えぬか」

「ふむ。儂は構わんが、そちは構わぬのか」

「なに。高が将棋。いかにラビといえど、そう容易くは勝たれまい」

ラビは一つ唸った。

「そうかもしれないが、そうで無いかもしれんの。それでもよいのか」

「ラビ、構わぬと申しておろう」

「そうか。儂は勝負をしようとしておらんそちとは、手合わせなど出来ん」

そう言つて、ラビは城を出ていった。

翌日。

ラビは昨日の様に王と対面している。

「二日も連続で儂を城に登らせるとは、そちは何を考えておるのじや」

「ラビ、今日は真剣に余と勝負せい。余はラビに勝つつもりよ」

ふむ、と考え込むラビ。

「では、儂が勝つたらどうにするのじや」

「どうにする、とは？」

「僕はそちが勝ったら、手持ちの書物を全てそちにやるつもりではないか」
「なんと」

王は考え込んだが、ラビの欲しそうな物の見当がつかない。

「ラビ、ラビは何が欲しい」
「この国を」

部屋の隅に控えていた宰相が慌てて立ち上がるも、王はそれを目で制した。

「ラビ、そのこのラビの弟子とまず手合わせしようではないか。余は二回、ラビは一回の勝負。構わんな」
「うむ」

「ラビ、余はラビの弟子に勝っただけで満足よ」
「賭けは」
「そんなもの、忘れたわ」

そう言って、二人は笑った。

0017今日を乗りきれっ！

俺は走っていた。

必死だ。兎に角、必死だ。

後ろからは異形物が追いついてくる。その数ざつと100。

眠たさと、学校へ向かいたくないという倦怠感にさいなまれる朝。今日はいつにも増して嫌な一日になりそうだ。

「こっこだー！」

「こっこだー！」

叫んだ彼を狙おうかと思ったが、それは後回しにして。

先程からつがえていた矢を、異形物が特にまとまっている辺りに放つ。

数秒のタイムラグの後に一体の異形物に刺さった矢は、その直後内蔵された火薬によって爆発する。

それに周りの数体が巻き込まれた事を確認して、また矢をつがう。

「うるさい」

「うるさい」

そんな声が聞こえた気もしたが、今は構ってられない。

走る方向を180度変え、ある程度分散した異形物の中に突っ込

む。

背中に担いだ大剣を構えるまでの一振りで、近くにいた1体を二分した。

そんな仲間の姿に激怒したのか、他の異形物が一斉に俺に襲いかかってきた。

「かかってきやがれ」

「かかってきやがれ」

そう挑発した矢先、早速ピンチになった彼は自業自得として、私は私の仕事をする。

『領域』から出ていこうとする異形物につがえた矢を放つ。

この『領域』は基本的には不可侵なので、出ていく事は簡単だった。

「もつとまшина『領域』作れないのかな」

「もつとまшина『領域』作れないのかな」

俺は何とかピンチをしのいで、今は散々になった異形物を手近な所から倒していく。

それにしても、あいつの矢は容赦がない。

『領域』から出ようとした異形物を一瞬で仕留めている。

そんな事を考えている内に、異形物を全て倒した。

「ふう、終わった」

「ふう、終わった」

そんな彼の側に降り立ち、渾身の一言を言った。

「今日はテストよ」

こう言った時の彼の顔程、面白いと思わないものは無いだろう。

0018 涙色の空

雲がうつすらと空を覆い、その下に満開の桜が一本だけ立っている。

3月9日。今日は卒業式だ。今は卒業証書の授与も終わり、後は学校と別れるだけである。

あちこちから聞こえてくる喜びや悲しみの声。そんな声を聞きながら、僕は只、桜を見上げていた。

太陽の下にあるような鮮やかさや水々しさ、夜の神秘的な様などは無く、綺麗とは言い難い。

そのせいだろうか。ここには僕しかいなかった。

鈍い、灰色と桃色を混ぜたような色。僕はこの色の桜が好きだ。

まるで、そう。桜の木も一緒になって悲しんでくれているかのよう。

ポツ

雨？

そう思って花の狭間から覗く空を見上げたが、天気は依然として晴れと曇りの中間を保っている。

では何だろうとよくよく見ると、桜に水滴が付いていた。

まさか桜が泣くわけは無い。多分結露の名残だろう。

だが、僕は何故だか哀しくなった。桜が泣かない事に、だろうか。それとも桜が泣けない事に、だろうか。

どちらにしても、僕は意思の無い桜に泣いてほしかったのだろう。

特に意識してはいなかったが、僕は溜め息を吐いていた。

溜め息一つは幸せ一つを逃がすと言うが、では一体その幸せはど

ここに行くのだろうか。

僕は空を見上げた。

涙色の空。

最近読んだ小説のタイトルだ。

涙も空も無色透明なのだから、と思った事もあった。
だけど。

この空が、多分、涙色の空なんだろう。

ハニードロップス
蜂蜜雫。

そう呼ばれる物がこの世界のどこかにあるという。

その雫は持ち主に幸運をもたらす^{ラビッツフット}兎足といった類のもでも、また呪剣^{カースソード}といった類のものでもない、と言われている。

一説によると、この蜂蜜雫を手に入れた人間は全員が全員、“こ
うふくなし”を手に入れられるという。この“こうふくなし”はその
発音だけが残されていた（厳密には、平仮名やアルファベットと
いったそれ自体では意味を持たない文字で蜂蜜雫の隣に書かれてい
た）ので、これが“幸福な死”なのか“幸福梨”なのか“甲府区梨
”なのか、あるいは別の意味なのかは分かっていない。だが、研究
者の大勢は“幸福な死”であると考えている。

では“幸福な死”とは何か。

これは諸説がある。その中でも大勢を占めるのが既幸福説と直前
幸福説だ。

既幸福説は死ぬまでの間に幸せが訪れるという考え。つまり蜂蜜
雫を手に入れた直後から死に至るまでずっと幸せである、というこ
とだ。これは、幸福な死は人生全てが幸せでないと訪れないという、
簡単に言ってしまうえば死ぬ時に幸福であるだろう、ということだ。

直前幸福説は、死の直前に幸福が舞い込むという考えだ。これは、
死が幸福なのであり、その死に方などが幸福なのだろう。無差別殺
人や突然の死ではなく、家族や友人に囲まれて見守られながら死ん
でいくのだろう、と考えられている。

科九風子^{しなぐ ふうし}は、最近妙な噂を耳にした。

蜂蜜雫^{はちみつ}っていう幸福アイテムがあるらしい。

“こうふくなし”が手に入るらしい。

そんな噂だ。

始め、科九はそれほど気にしていなかったのだが、その中の蜂蜜雫と“こうふくなし”という二つのキーワードが気になった。

ハニードロップスは科九が書こうと思った小説のタイトルだ。そしてそれを思い付いたのは旅行に行った時、洞窟の中を散策している時。その時いつもの癖で、その壁にハニードロップスと書いて、蜂蜜雫と書いて、その後には自分の名前を書いて。

何でそれがこんなにも伝わったのだろう。

0020この声が届く距離

「音には大きく3つの要素があるんだ。v \parallel f っていう式から解る、周波数と速度。それと波の強さを表す式にある、振幅。分かりやすく言うと、それぞれ音の高さ、速さ、大きさだね。その3つの中で、速さは音の通過する物質とその温度に因る所が大きいよね。まあ、糸電話みたいなものでも解るけど、固体は音をより遠くまでより速く伝えられるね。音の高さは、そう、夕焼けを思い浮かべてみて。波長の長い赤い光は振動数、つまり周波数が少ないからこそ、空気に遮られても遠くまで届くんだ。音も振動数の少ない、低い音のほうが遠くまで届くね。最後の音の大きさだけど、これは単純に大きい方がいいよね。つまり、固体中で周波数の低い、大きな音を出すんだ。でも、別の要素も結構あつて、例えばそう、共振。何年か前の話だけど、新しくできた吊り橋があつてね。その橋は普通なら壊れる訳が無いんだ。でも、沢山の人が歩いた事で壊れてしまった。これはね、橋が予想以上に大きく揺れてしまったためなんだ。風が吹いた訳でもないのに何故大きく揺れたか。それが共振というものだよ。あらゆる物体とか空間にはその固有振動数というものがあるんだ。んつと、簡単に言うと、ラバーペンシルイリュージョンって知ってるよね。そう、あの鉛筆をくねくねさせるやつ。あれってさ、一定に揺らさないと綺麗にできなかつたよね。逆に言えば、ある一定の振動数で揺らさないといけない。それを固有振動数つて言うんだ。それで、物体はこの固有振動数で揺らされると大きく揺れる事が知られているんだよ。吹奏楽器もそうだし、前言った橋の例だと、たまたま人の歩みが橋の固有振動数と一致してしまったんだね。つまりは、音を通す物体の固有振動数とその音の振動数と一致するようにすればいいんだ。他には、そうだな、固体の形状とか材質とかも関係するな。まあ、そんなことを考えて、だ。人間の聞こえる一番低い音は20Hzって言われているから、この周波数で

大きな声を、これにみあう固有振動数の定数倍を持った、水晶みたいな出来るだけ純度の高い絶対零度の固体中を通せば、結構遠くまで届くんじゃあないかな」

0021抱きしめて、離さない

ムギユツ

そんな擬態語と一緒に、妹は俺に抱きついてきた。

「おにいちゃん？」

最後の？が気になったが、いつものことだ。

「おい、」

「やだ」

「まだ何も言って」

「やだ」

「最後まで人の話を」

「やだ」

妹はまるで聞き訳のない子供のようになり、いや実際にそうかもしれないが、ダダをこねていた。

「くすぐってもいいんだな」

「我慢するもん」

「よし。なら」

妹の脇腹に指を触れた。

「きゅっくゅっ」

妹は俺に更に強くしがみつくと、事だんとか耐えている。そう恨めしそうに睨まれても困るのだが。

「……シスコン」

突然後ろから聞こえてきたボソボソとした声に、俺の手の動きが止まった。

妹が俺に抱きついたまま、その声の主を見て言う。

「あつ、か」

「その名前で、呼ばないで。……嫌いになる」

妹は後ろの彼女に対しても恨めしそうに睨んだ。

彼女はそんな視線に気付いているのかいないのか、続けた。

「私は、シャイだから、名前で呼ばれるの、嫌い」

彼女の表情は見えないが、多分無表情の中に僅かに膨れっ面を混ぜたような感じだろう。

「うっ。ミセス」

「そう。それならいい」

「うっ」

自分が言っていないにもかかわらず、このミセスという呼び名は恥ずかしく感じさせる。

だが今はそれよりも、だ。

「妹よ、離れてくれたまえ」

「やっやっ」

しばらくはこの状態が続きそうである。

0022 アナタが嫌い。だけど、それ以上に大好きよ。

「なんでついてくるの!」

前を歩く高校の制服を着た女は、後ろを歩く同じ高校の制服を着た男に叫んだ。

「なんでって言われても、目的地が同じだし」

そう冴えない男は頬を掻きながら言うが、短髪の女は更に続ける。

「目的地が同じだからって、私の近くを歩かないでよ。迷惑なの」

そう言って、男が立ち止まったのを好機とばかりに歩を進めた。

「ねえ、また噂になってるよ」

「何が」

「彼と痴話喧嘩したって」

「そんなわけないでしょ」

短髪の女は長髪の女と教室で話している。

「でもいつつも一緒にいるよね」

「アイツが勝手についてくるだけよ」

「たまたま登校中に一緒になっただけじゃなかったっけ?」

「どこからいたの」

「『なんでついてくるの!』あたりよりも前だったかな」

短髪の女は溜め息を吐いた。

「で、何が言いたいの」

「ん〜。好きでしょ」

「なな、何を言っているのかしら。そんなことあるわけ」

「私、まだ何も言っていないよ」

顔を赤くした短髪の女は、うつむいたままチャイムが鳴るまでじっとしていた。

「なんで、アンタがここにいるのよ」

下駄箱に手紙を入れ体育館裏に呼び出す古典的な方法で呼び出された短髪の女は、やって来て呼び出した張本人を見止めてそう言った。

「えっと、呼び出したから？」

冴えない男は頬を赤く染めていた。夕焼けのせいだけではないだろう。

短髪の女は一つ溜め息を吐いた。

「アナタはどうしてそうやって」

「好きです。付き合ってください」

絶句。

「アナタが嫌い」

顔を赤くした短髪の女は踵を返して、そして小声で付け加えた。

「だけど、それ以上に大好きよ」

0023 嫌いになれたらどんなに楽だろう

『気楽にナナウランドにいられたら』

近頃話題の総合遊戯施設『ナナウランド』の宣伝文句だ。

CMに人気の役者を使った事でその人気は鰻登り。地理的に都心から近い事もあり、その勢いは衰えを知らなかった。

一日中いても回りきれない程のアトラクションや映画館、動物園に水族館に科学館に博物館、更にはショッピングモールに世界各国のレストラン、そしてホテル。ここに来れば全てが揃うとまで言われる程の施設。

そんなナナウランドにやってきた彼と彼女の二人は群衆の中でも目立っていた。

「こっちがいい」

「最初に行くって言ったの、お前だろ」

「そうだけでも、気が変わったの。こっちにして」

「でもな、そこよりこの方が近いだろ」

指示語が多いが、次に行くアトラクションを何にするかで言い争っているようだ、という事は分かる。

何と無く近寄りがたくて、二人の周りには半径10m程の人壁ができていた。

「貴方なんて……」

人壁の間から道化師が近付いてくる事に二人が気付くのは、もう少し後の話。

気軽にナナウランドにいられたら。

実はこの言葉には裏事情がある。

ナナウランド広報部企画課の一人がとある遊園地で彼女と些細な事で喧嘩をしたのだが、両想いである事が分かっている故に、気不味い雰囲気のまま二人で遊園地を廻ったという。

そこで、もっと気軽に気楽にいられるような雰囲気作りを目指し、そしてキャッチフレーズが決まった。

『気楽にナナウランドにいられたら』

ちなみに余談だが、平仮名に直して並べ替えると『嫌いになれたらどんなに楽だろう』となる。

これが意図したものかどうか、正式な発表は無い。

0024 眠れない夜に奏でる 子守唄

音というものは、どうしても感情に直接作用するのだらう。リラックスさせたり、そうかと思えば恐怖させたりする。そして今、私はイライラさせられていた。

ブーン

蚊の羽音だ。

ベッドに横になった後のこの音は本当にイライラさせられる。

蚊はブーンと音を出すから虫偏に文だと言われているが、今まさにそれを実感している。

電気を消した真つ暗闇の中で蚊を捕まえる事は難しいが、電気をつけるために起き上がるのは億劫。そんな葛藤を知ってか知らずか、蚊は依然として耳元をさまよっていた。

寝返りをうってもその音が耳元から消える事はない。

「眠れない夜に奏でる子守唄」

「はい、今日もこのコーナーが始まりました」

「このコーナーは、リスナーの皆様から頂いた寝る時に聴きたい曲、聴くとよく眠れる曲を紹介していこう、というコーナーです」

「それでは早速紹介していきましょう」

「はい」

「まず始めは」

ブーン

いつも聞いているラジオをつけてはいたが、蚊の音が邪魔でよくは聞こえてこない。

このまま蚊が眠ってくれればいい。でなければ電気をつけよう。そう、私は心に決めた。

「 でした」

「ん〜、この曲で眠れる人は、ある意味凄いですね」

「ですよ。でも、慣れ親しんだ曲だからこそ、じゃないですか」

「そうかもしれないね。ではでは続いてのリクエストにいけますか」

「はい、どうぞ」

「次は」

0025 深夜1時40分

『1000の年、1000の日、1000の時に災厄が世界を包みこむ』

予言書の一文だ。

ほとんどの研究家がここを只の言葉遊びと考える一方で、少数ではあるがかなりの説得力を持った解説を施した者たちがいた。曰く。

『1000年の1000日、つまり暦が1000年になる年の1000日目。1000の時、つまり深夜1時40分に世界に何らかの災厄が振りかかる』

と。

深夜1時30分

満天の星空の下、世界中の人が一つの山の上に集まっていた。

その中央に立てられた楼の上、まだ年端もいかない少女が祈りを捧げている。否、寝ている。

少女が寝ている事に気付いているはずの唯一の生物である“うさぎ”も寝ている。

時間は深夜。

予言書に何が書かれていても三大欲求の一つ、睡魔には敵わなかったようだ。

深夜1時40分

静寂が辺りを包むが、その状況をお伝えできる人間は誰一人としていなかった。

そう。

全員が眠ってしまったのだ。

やはり人間の三大欲求の一つ、睡魔には敵わないようだ。

後日、無事に災厄を乗り越えた人間は、しかし誰一人として何が起きたのかを見てはいなかった。

学会で、災厄が振りかかると唱えた研究家は、しばらくしてこのような考えを示した。

曰く。

『災厄とは、睡魔なり』

と。

“うさぎ”が目を覚ますと、既に太陽は天頂に達していた。

ふわりふわりと中空を漂いながら、そっと自分のした事を省みる。

苦痛を味あわせないように少女だけ寝かせようと思った。

やりすぎて自分も眠ってしまった。周りの人間も眠った。

起きたら何も変わっていない。災厄は起こらなかった。

少女が死なないで生きていてくれて、とても嬉しかった。

一つ、“うさぎ”は頷いた。

0026 物言わぬ恋人

熱いほどの日差しを一身に受けて、私は坂を上っている。

白いワンピースに白い帽子。周りは草木が覆い茂る、里山という表現がピッタリの場所でこの格好をすると、まるで映画のワンシーンのように感じる。

手には花束。彼が好きだったナデシコが小さく添えられたこの花束は、花屋を営んでいた彼の母親が作ってくれたものだ。

数年前。私と彼はこの場所にやってきた。都心の喧騒から逃れ、日々の苦勞も忘れて、私たちはこの道を歩いた。

あの時はまだ春先で、ナデシコは咲いていなかったけれど、彼はあちこちに咲く野花を見て嬉しそうに微笑んでいた。

目の前を、黄色いモンシロチョウが横切る。本当の名前は知らないけど、何と無く気分を落ち着かせてくれるチョウ。

坂を上りきると、そこは道の無い広い草原だ。所々に赤紫色が見えるが、多分ナデシコの花が咲いているのだろう。

私は草原を横切り、隅に置かれた石まで走った。

帽子が飛ばないように片手で押さえていたためか走りにくかった。

「ハアハア……」

立ったまま膝に両手を置いて呼吸を調える。

声の届かぬこの場所で

僕はいつでも見守って

そんな言葉から始まる短い詩。

死の予感がしていたのだろう彼は私にこの詩と思い出、そして娘を残していった。

まだ小さい娘は彼の母親の所に預けてきた。いつか、連れてくる事になるだろう。

そつと膝を地面に突き花束を横にして置くと、物言わぬ恋人にいつもの言葉を投げかけた。

「バカッ
」

0027 生きていた時は誰だってみんな必死だから さ

……カンカンカンカン……カンカンカンカン……カンカンカンカン

空襲警報。

小さな山奥の村だが、一つの軍関係施設が建っていた。

関係施設といっても何年か前に関係者が一度来たきりで、今は閉鎖されているも同然だった。

なのに何故

この思いは村人全員が持っただろう。

だが無情にも爆撃機らしき陰が真っ直ぐに村に向かってきている。

数時間後。

「何で、みんなねてるの？」

焦土と化した村。

そこに隣町の学校まで通っていた男の子と女の子が寂しげに立っていた。

村にある家々を見る陰もなく、唯一形の判る集会所も黒くなっていた。

畑は只の黒い大地となり、朝までは綺麗だった川は濁っていた。

「ああ。それはね」

黒い凹凸の多い地面を踏みしめ、異臭のする村をゆっくりと歩く。目線に移せば、そこには無惨な死体が見える。だが、男の子と女の子はその一つ一つに目をやり、足を向けた。まるでここに来ることが二度とできない事を知っているかのよう

に。
「生きている時は誰だっ てみんな必死だから さ」

呟いた言葉は火の小さくはせる音に掻き消されたが、女の子はしっかりと聞き取ったようだった。

顔が焼け焦げ、服が破れ。流石に骨が見えていることは無かったが、それに近いものもあった。

男の子は一つ一つに手を合わせ、そしてまた別の死体へと向かう。その後ろを女の子が付いていく。

「安らかなる時を」

0028背中合わせで思いつく

頭は冷静に、体は熱く。

頭寒足熱という表現があるが、俺のポリシーは頭寒体熱だ。

精密な動きの中にこそ勝気は見えるが、その動きを実現するためには力は勿論のこと、知識も必要だ。

今、俺たちを取り囲んでいる魔物は学術的には低ランクに属する。つまり、弱い。だがその実体は群で行動するため、手強い。

知能が中途半端に発達してしまったがために、一筋縄ではいかないのだ。

長期戦に持ち込まれると入れ替わり立ち代わりに襲ってきてこちらの体力を消耗させるため、短期で終わらせるのがセオリーだ。

汗でぬめる剣の柄を握り直し、鋭く魔物を見つめる。

俺の後ろでも同じように握り直した事を耳で確認すると、痺れを切らした魔物が襲ってきた。

それを目視するより早く、俺は走り出した。

何でこんなことになっちまったんだ。

たしか傭兵の仕事が終わって帰ってくる途中、女の声が聞こえたからそれを辿るとこのザマだ。

長年傭兵つてのをやっていると、こうやって弱い奴らが集まった時の怖さつてのを知っている。

だからなんだ。螺子伏せる。

まあ正直そうしたいのは山々だ。

だが、弱い奴らは直ぐに元の鞘に納まる。強い奴らは元の鞘に納まる事は難しい。

それなら弱い奴らの成長を待とう。それだからのほづが、手間が

省ける。

背中を預けた友が剣を握り直した音を聞いて、俺も握り直す。
と同時に、魔物どもは襲いかかってきた。

0029 おやすみなさいのちゅーは基本だよ？

「彼とは上手くいってるの？」

「う、うん。まあ」

「それでそれで、寝るときとかこうやって」

「や、やだなあ、そんなことしてないよ」

「してないの？ おやすみなさいのちゅーは基本だよ？」

「ちゅ、ちゅちゅちゅ、 / / /」

「やーだ赤くなっちゃって。もしかして、手は」

「握ってない握ってないよ〜どうしょ〜」

「（やっとなりの重大さに気付きよったか）」

「どうやって握ればいいの？ こう？ それともこう？」

「……」

「あ、握るのはお寿司だからこうやって」

「もう、何も言うまい」

「えー、何でー。お寿司の握りかたくらい教えてよ」

「知らんわ。まずは落ち着きや。うちにそんなこと訊かれても困るんや」

「……訛り？」

「気にするな」

「じー」

「そ、それよりもさ。握りかた、だったよね」

「……じー」

「まずは酢飯を適当に」

「……じー」

「はあ。もう分かったから。寿司はこうやって握るの」

「そんなことしてるカップル、あんまり見たことないよ」

「……」

「……」

「……」

「ん？」

「何も言つまり」

「何か言わないと、作者さんが困るよ？」

「作者？」

「ううん、何でもない。主人公の特権だから、気にしないで」

「そ、そうなんだ」

「うん。(< | >)」

「へー」

「あ、でも彼、こんなこと言ってたの」

「どんなこと？」

「えっと。『いってらっしゃいのキスをして』？」

「ふーん。それで、してあげたの？」

「あ、当たり前でしょ。恋人同士、なんだから」

0030 いったらっしゃいのキスをして

「なあ、彼女と上手くいってるみたいだな」

「ああ。いったらっしゃいのキスをして、って言ったらしてくれた」

「そうかーそうかー。親友の僕は嬉しいかぎりですよ」

「何で棒読みなんだ」

「あーあー、これだから恋の病は。どう思いますか、解説の……ハア。寂しい。寂しいよ、パトちゃん」

「パトラ」

「やめやめ。言っちゃ駄目だ。この小説は『名前の無い小説群』なんだから、名前は出来るだけ出さない。これ、常識。ていうかそれ以前の話」

「何を言っているんだ。ついに壊れたか」

「気にしない事だ。いわゆる主人公の特権ってやつだ」

「本当に壊れたな」

「気にするな。所で、これは、やったのか？」

「これとは？」

「寝るときのちゅー」

「ちゅ、ちゅちゅちゅ、 / / /」

「あのな、『おやすみなさいのちゅーは基本だよ?』」

「そ、そうなのか」

「そうだ」

「そ、そうか」

「そうだ」

「……」

「……」

「と、所で、どうすればいいんだ」

「何が？」

「いや、言いにくいんだが、その、な。あれだ」

「あれ？」

「そう、あれだよあれ」

「ああ、あれね。あれをやるには、まず酢飯と刺身を用意して酢飯を握る。それでその上に刺身に乗せれば完成だ」

「寿司？」

「ああ」

「……」

「ん？ どうした？ 握りかた、だろ」

「いや、なんか似てて」

「彼女に？」

「ああ」

「そりゃ当然だ。彼女は俺の妹だからな」

「！！」

「知らなかったのか？」

「あ、ああ。お兄様」

0031 砂時計の落ちた砂は戻らない

魔力回路基礎理論

そう呼ばれる講義は人気が無い。

古魔法学関連である魔力変換回路（MTC）の仕組みや魔法陣の基本構成理論、魔法学関連の魔力集積回路（MIC）の仕組みが主な内容だ。将来的にはMICの設計や電子と魔法力素粒子とを双方用いた新型のMIC（魔電集積回路（MEIC）と呼ばれる）の設計の基礎となる、大事な分野である。

それでも人気が無いのには理由がある。

内容が難しいのだ。この講義を取る僅かな生徒の中でも、単位を取得する生徒はほんの僅か。いかに先生が優しかろうが、易しく教えようが、難しいものは難しい。

例えば、MTCの仕組みを簡単に説明するしてみよう。

「MTCは複数の装置が一つとなつていているものが考えられています。受容部と呼ばれる魔力素子^{マナ}を受け取る所、変換部と呼ばれるマナを純粹なエネルギーに変える所、適用部と呼ばれる純粹エネルギーを思い通りの別の現実的なエネルギーに変換する所、発現部と呼ばれるその変換されたエネルギーを脳からの指令と合わせて特定の形で放出する所の四つあります。それぞれ簡単に説明していきましょう。受容部はマナ同士の反発性を利用してある箱のようなものになってしまうと考えられます。変換部はマナを“燃烧”させることで純粹エネルギーという仮想的なエネルギーを得ます。適用部は仮想的な純粹エネルギーを、電氣的エネルギーを使って“動かす”ことで現実的なエネルギーにしています。最後の発現部は得られたエネルギーを外部と“連結”させることで放出しています」

ここまででは理解できる人も多いただろうが、マナの量とその反発係

数の関係式や、その反発係数を変数に持つマナと純粹エネルギーの仮変換効率と実変換効率、さらに“動かす”事に必要な電気エネルギーの量や、最終的に得られるエネルギー量など、手計算だと非常に間違いやすいものばかりが揃っている。

例題として、このようなものを挙げてみた。

「一粒10の-2乗gの砂が入った1分の砂時計の片面に、砂を60秒間移動させないための一重円内方形魔法陣を張る。この時MT Cに於いて使われるエネルギーの総量を有効数字2桁で答えよ」

手計算では解答が非常に難しい問題である。

さらに“燃烧”“動かす”“連結”といった抽象的な単語を理解することも、非常に難しい。

0032その眼鏡、割ってもいい？

「文化祭規定の第4章装飾についての第5項1節、いかなる装飾も既存のものを破損、または変形させてはならない。そして第8項、後日行われる後片付けでは全て元通りにしなくてはならない。また装飾規定の第7項には、金属またはガラスの部位のみにセロハンテープ、布製ガムテープ、両面テープ、糊の貼り付けを許可し、また掲示板、天井、コンクリートでない壁は画鋏のみ、黒板はマグネツトのみ使用を許可する。但し、本項はその所有者が学校側にある場合のみに適用される。こうあるが、これは何だ？」

背の高い、細い眼鏡を掛けた如何にもといった見た目の生徒会長は、黒板に貼りつけられたセロハンテープに視線を向けた。

「装飾規定違反はペナルティが重い事は、君も分かっているだろう。今回は一回目という事でペナルティは無いが」

「あの、会長？」

「何だね、副会長。私は今説明している所なのだよ。口を挟まないでもらえないか」

「いや、でもですね」

「ああ、そのセロハンテープはさっさと剥がしておいてくれ」

「……」

「ん？ どうした？」

「その眼鏡、割ってもいい？」

「どうしてだ？」

「……」

「……」

「……アンタにはアレがセロハンテープに見えんのか、え？ どこからどう見れば、アレがセロハンテープなんや？ どう斜め上から

見ようが、マグネットやないけ。マ・グ・ネ・ツ・ト。そんなでもア
ンタはこんクラスにペナルティ課す気か？ そうしたら、どうなる
か分かってるんやろうな、会長？ クビやクビ。ウチが会長代って
やるさかい、安心しいや。今よりもっとマシな活動があるやろ。そ
もそもな、こつやつて生徒会が文化祭実行委員マガイの事をしとん
のがあかんのや。餅は餅屋や。そん位の事分からんかい。それとな、
前々から言おう思っと思ったんやけど」

「副会長」

「なんや？ 文句でもあんのか」

「その眼鏡、割ってもいい？」

「え……」

「……」

「……／／／」

0033 嘘つきはなんとやら

嘘、という単語には、いくつかの慣用句が存在するな。

嘘八百、嘘も方便、嘘から出た真、嘘つきは泥棒の始まり、嘘ついたら針千本伸ばす。

あとよくあるパラドクスで、俺は嘘を吐いている、っていうものが知られているな。

まあ兎にも角にも、嘘つきは三文の特にもならん。

例えばこんな話はどうだ。

嘘つきの村

とある世界のとある時、とある場所に嘘つきの村があつてな、そこには実に美しい娘がいたそうさ。

その村にある男がやってきた。その男が美しい娘に恋をする、まあ、よくある話だろう？

まあ、嘘つきの村って言う位だから、会話は全て嘘になっている。男は旅をしているわけだから、ここが嘘つきの村だつていう事は知っていたんだ。だから会話は滞りなく行われて、そこに何泊かすることになった。

だが、何日経つても男は村を出ていく様子がない。

そこで村人は気付いた。男が美しい娘に恋をした、とな。村人にとってそれは珍しいことではなかったから、別段気にはしていなかったらしい。

その内、男と美しい娘の仲睦まじい姿が見られたそうさ。

ある時、男が急に村を出ていく、と言い出してな。

その村の長老、まあ俺もその人から聞いたんだが、が訊くと、美しい娘が“大好き”と言つたららしい。

長老は娘がそのような事を言うはずがない、と思いながら、男はその前に何を言ったのかを訊いた。
すると男はこう言った。“大好き”と。

まあ、俺が聞いたのはここまでだ。

このあと男や美しい娘がどうなったのかは知らんが、生きてるならきつと幸せに暮らしてるだろうよ。

ん？ 長老が嘘を言ってるかも知れないって？

そりゃあないな。ちゃんと話し始める前に、これは本当の話じゃ、って言ってたからな。

0034 オレンジ色の夕焼け空

僕はいつも思うのだ。

どうして夕焼けは赤やオレンジなのだろうか、と。

視線を移せば黄色や緑、時にはピンクも見ることができると。

「どうして夕焼けってオレンジ色なんだろう」

「波長が長いからでしょ」

僕の幼馴染みがそう言った。

詳しくは知らないけど、空の色は光の波長か何かの性質で青くなったり赤くなったりするそうだ。

「まあ、そうなんだけどさ。何でオレンジ色とか赤にこだわることになって思ってたね」

「こだわる？」

「うん、そう」

僕は頷いて、空に目を向けた。

そこには虹色の空がある。

「理由なんて無いでしょ。皆が赤だと言えば、それがもし青だったとしても赤になるんだから」

「ブルー・グリーン語だね」

「違うわ」

バツサリである。

止まりかけた歩みを再開して、こだわる意味について考える。

青空って言うように昼間は空は青く、夜空は昔は寝ているからあ

まり見ない。夕焼け空は境目だから特別だったのだろうか。

否、逆に虹が特別だったのかもしれない。

「どっちだろう」

「何が？」

「うん、虹が特別なのか、夕焼けが特別なのか。空は昼と夜の境で虹色になるけど、それだと虹と被るから赤にしたのかなって」

幼馴染みは突然立ち止まって溜め息を一つ吐き、そしてこう言った。

「そもそも、夕焼けって赤い空の事。それで夕焼け空は夕方の空の事だから、赤とかオレンジっていう感覚は夕焼けってという言葉につられただけでしょ」

「オレンジ色じゃあなくても夕焼け空とは言うのか」

「そうよ」

空を見上げる。

もう群青になってしまった空を見て思う。

やっぱりオレンジ色の夕焼け空が一番それらしい、と。

0035 声を聞かせてよ

いたる所に飛び散ったガラス片に鉄筋が剥き出しのコンクリートの塊。

ある建物は途中から綺麗に無くなって、またある建物は壁だけがほとんど無くなっていたりする。

数十分前までここで何が行われていたのか、この世界の住人ならば知らない者はいないだろう。否、目の前に倒れているロボットや建物に叩き付けられて動かない少女を見れば、もしかしたら誰でも想像ができるかもしれない。

スツと体を右に傾けると、空いた空間を何かを通り抜けた。

「まだ、生き残りがいたのね」

後ろから声が聞こえるがそれに構うことなく、少女に近付いていく。

舌打ちが聞こえた。それに続く人の迫る気配。

「ぐっ……………」

そう言って倒れ動かなくなった人など気にする必要もなく、ただ少女に近付いていく。

「…………ねえ」

足を投げ出して、壁に上半身を預けている少女は、私が来たことなど気付いている風もなく、ただただ黙っている。

「ねえってば」

起きてもらおうと少女の体に触った瞬間、気付いた。
もう、死んでる。

死体は今まで何度も見てきた。だから

「ねえ、声を聞かせてよ」

だからこそ、親愛なる友の死が受け入れられなかった。
少女の体を揺する。

頭はその動きに合わせて揺れるだけで、意思を持っているように
は到底思えない。

風が吹き抜け、自分が泣き叫んでいることにも気付かず、ただ、
そこにある現実を受け入れられなくて。

0036 水面に映る自分の姿

いつの間にか俺は森の真っ只中にいた。

さつきまで確かにコンクリートの森の只中にいたはずだが。しかも、ここにある草木は普段見るのよりも大きい気がする。

まるでこの場所は俺のだと言わんばかりの大木、地面を埋め尽くすコケやシダやゼンマイのような草、赤や緑や青に変色した岩があり、湿気が多い。

まるで、別世界に来てしまったような、そんな気分だ。

「まさかな」

そう呟いて苦笑し、俺は歩きだした。

……何か今、違和感があったような。

下を見ればコケやシダの数々、上を見れば木々の葉、前を見れば木の幹。そんな光景がここ一時間は続いていた。

「誰かいませんか！」

よく物語なんかだと人なり動物なりが出てくるが、ここに来てから生きている動物は自分しか見ていない。

こうやって叫んでも返ってくるのは沈黙のみ。

一体全体、ここはどこなんだ。

と、目の端に光るものを捉えた。本当に一瞬だったが、木々の狭間が光ったのだ。

自然とそっちの方に足が向く。

凸凹が激しくて進むのは大変だったが、その内に湿気がなくなってきた事に気付いた。

木もさつきまでのように覇権争いをしている風ではなく、共存の道に進んでいるかのように適度な間隔が空いていた。それに伴って、歩きやすくなる。

光るものは意外と大きいもののように、これはまるで、

「湖か」

急に視界が開けたかと思うと、そこには巨大な湖があった。

湖を囲む陸地はうっすらとしか見えず、もし雲っていたならば海と間違えていたかもしれない。

後ろを振り返ると、そこは鬱蒼とした森がある。

俺は一つ溜め息を吐くと、視線を湖に戻した。

風はなく、水面はまるで鏡面のように綺麗だった。

何となしに覗きこんで見る。

そこには、10才に満たない少女が映っていた。

0037 ひまわりの笑顔

「おかーさん、おとーさん」

これは夢だ。

「ちゃん、そんなに走ると転ぶわよ」

少女がひまわりの中を潜りながら両親の元に走っているようだった。

「キヤッ！」

少女が転んだ、否、転ばさせられた。
その原因となったのは、一本の蔓。
その蔓を辿った先には。

「おかあさん？ おとおさん？」

両親だったのだろう、二本の人面ひまわりがいた。
片一方の顔が笑顔になる。

「フーカマーエタ」

笑顔が次第に狂気なものになり、甲高い笑い声がひまわり畑に響きわたる。

恐怖で体が震え、思うように体を動かすことのできない少女は、只じっとその様子を見ていた。

「コツちへ、おいで？」

嘲笑するかのような耳障りな音の中で、その小さな声はやけにはつきりと聞こえた。

笑わない一方が、人に喩えるならば首に当たるであろう部分を傾げ、手に当たるであろう大きめの葉で手招きをしている。

ガチガチと歯がぶつかりあう音が脳内に響き、汗をかいていることにも気付かず、少女は両手を地面に這わせて後退ろうとした。

「こつちへきなさい」

蔓が少女を二つの人面ひまわりの元へ持ってこようと、体に巻き付いた。

そして一瞬で縮んだ蔓に引きずられて、少女は一直線に飛ばされる。

刹那見えたひまわりの顔は、満面の笑みだった。

「ああ イってシマった」

勢いの付き過ぎた少女の体は二つのひまわりの上を飛び越え、遙か彼方へと飛び去っていく。

ひまわりの笑い声が一面に響きわたる。

どれくらい飛んだ頃だろう。自分が飛べることに気付いた。そして

「コラー、いつまで寝てるの。早く起きないと遅刻するわよ！」

ゴソッ
ベッドから落ちた。

0038午後5時50分の教室

「最終下校時刻15分前になりました。学校敷地内にいる生徒は、下校しましょう。繰り返します。最終下校時刻15分前になりました。学校敷地内にいる生徒は、下校しましょう」

喋り終わり、赤くともっていたライトが消え、廊下から『家路』が聞こえてきて、ホッと息を吐いた。

「お疲れ」

伸びをして背もたれに体を預けた時、ここ放送室の扉から一人の同級生が入ってきた。

「まだもう一仕事残ってるけどね」

私がそう言うと、同級生は手招きをした。

「ちょっと来れる？ 面白いものが見れるよ」

「うん？」

次に放送を流すのは10分後の午後5時55分なので、私は立ち上がって彼女についていくことにした。

着いた先は2年1組の教室、つまり私のクラスだ。腕時計を見ると午後5時48分だった。

「何があるの？」

「まあ待って。50分になれば分かるから」

教壇に上ると、誰もいない事を寂しく感じた。

なんのへんてつもない教室。机と椅子がそれぞれ36脚ずつ。後ろの壁には色々と貼ってあり、窓からは校門が見える。

隣にいる同級生は、目を輝かせて中央を見ている。

「何が」

起こるの、と続けようとした言葉は、目の前で繰り広げられ始めた光の芸術によって、止められた。

窓から差し込むオレンジの太陽光が教室内をランダムに反射し、ダイヤモンドの中のような幻想的な風景を映し出している。

教室中がオレンジ色に染まり、まるでこの教室が自らウキウキと楽しんでいるようで。

「すごい」

そんな言葉が自然と口から溢れ落ちた。

だけどそんな光景はほんの僅かな時間で終わってしまった。

「凄かったな」

「うんうん、本当に。ねえ……」

首を横に向けた瞬間、目に入った生徒の姿に絶句する。

彼がこつちを向き、そして微笑みかけてくる。

突然の出会いに頭が混乱し、彼が何と話しているのかが分からない。

彼女はどこに行つて、彼はなぜここにいるのだろうか。

視線をあちこちにさまよわせ、目に入った時計を見た。

5時53分

「あつ、ごつごめん、放送室に戻らなきゃ」

「校門で待ってるから」

教室を慌てて駆けて出ながら聞こえた声に、私の胸は熱くなった。

0039 メリーゴーランドに乗りましょう

「さて、次の商品は何でしょうか？」

「次の商品はこれ、『メリーゴーランド』です」

「メリーゴーランドって、遊園地とかにあるものですよね。これはそうは見えませんが」

「あくまで商品名なので遊園地の物とは違う物ですよ」

「では、これで何ができるんですか？」

「何とですね、これはタイムマシンなんです！」

「嘘。そんな物があるわけ」

「無いとお思いでしょうが、この我が社が数十年を費やして造った『メリーゴーランド』は、本当に時間を飛べるんです。論より証拠と言いますし、まずは実際に使ってみましょう」

「どうすればいいのですか？」

「まずはこの隅にある画面をタッチして、飛びたい日時を入れてください」

「はい。……今から2分後に設定しました」

「そしたら二畳程のマットの上に両足を置けば、5秒後に時間を飛ばしてくれるんです」

「では、乗せますよ」

「はい、どうぞ」

「では、彼女が飛んだ2分後まで、詳しい操作説明をしておきましょう」
「う」

「という訳で、もし万が一間違っただけの場合も安心して戻ってくる事ができます。そろそろ2分が経ちましたね」

「……………」

「お帰りなさい」

「ただいま。ここが本当に2分後なんですか？」

「勿論です。腕時計を見比べてみましょう」

「あつ、本当に2分経っています」

「はい」

「でも、こんなに凄いものなんですから、お値段が」

「ご安心ください。我が社が精一杯努力した結果、なんと税込み価格、99万8000円でご提供させていただきます」

「99万8000円！ 安い」

「送料は我が社の全額負担。さらに複数回払いでの金利も我が社が負担いたします」

「ふとっばら！」

「画面下に出ている電話番号をタッチしてご注文ください」

「『メリーゴーランド』に乗りましょう！」

「さて、次の商品は何でしょうか？」

0040 夢の世界を見せてあげる

「夢の世界を見せてあげる」

突然現れた少女はそう言うやいなや、僕の手首を華奢な手で掴み、ぐっと引つ張られてバランスを崩した僕を小さな体で抱きとめる。それと同時に視界が真っ白になり、僕は眩しくて目をギュツと瞑った。

「おーい、生きてますかー？」

掛けられた声に恐る恐る目を開けると、目の前にあの少女がいた。

「君は、誰？」

「私？ 私は、えっと、ね。ひ、秘密よ」

「秘密ちゃんか、珍しい名前だね」

「……そうじゃないんだけど」

「うん？ 何か言った？」

「ううん、何でもない」

「そう。それで、ここは……」

どこかと思つて視線を動かすと、一面の空だった。四方八方が。そういえば、一面のなんとかつていう詩があったよな。

「空中だよ」

現実逃避は上手いかずに、秘密ちゃんの一言によってあっさり

潰された。

って空中?!

「ええーーーーー!つええーーーーー!!!」

「息継ぎしてまで驚かなくても」

「いやいやいやいやいや、落ちるって、ていうか落ちてるって。どうするんだよ」

「大丈夫よ、これは」

「大丈夫じゃないだろ大丈夫じゃないだろ、空中だぞ空中。落ちたら死ぬぞ、死んでもいいの、いやよくない。天国のお母さんお父さんに親孝行ができないじゃないか」

「あなたのご両親は健在でしょ。それにもし天国にいるなら、あなたも天国に行った方が親孝行ができるんじゃない」

「そ、それもそうか。よし、このよく分からない流れに身を任せて、僕は天国に行く!」

「別にあなたが天国に行くのは一向に構わないけど、このままじゃ、死なないわよ」

「よし分かった。なら自分から……って、ええーーーーー!つええーーーーー!!!」

「だから、息継ぎしてまで」

「僕死なないの死なないの?」

「え、ええ、そうだけど」

「ヒヤッホー! ありがとうありがとう、秘密ちゃん。君のお陰だよ。こんな所で死んでられないよね」

「ど、どうも」

「それでそれで、ここは結局どこなんだい?」

0041 真夜中の御伽噺

……シャンシャンシャンシャンシャンシャンシャン

遠くからジングルベルの音が聞こえてきた。

今日は12月24日、そして今は24時になるかという時間帯。

こんな音を鳴らすのは、あれしかない。

そう。

サンタクロースの乗るソリを引く八頭のトナカイの首に取り付けられた鈴だ。

濡れても錆びないようにと銀でできた鈴は、まるで宝石のように星空の下で輝いている。

まあ鈴の話はこれくらいにして。

サンタクロースの乗るソリの中には、白い袋に詰められたプレゼントの山。彼が配る分だ。

毎年、本当にサンタクロースを信じる世界各国の子どもたちからくる手紙に書かれたプレゼントを、用意して配達する。

それがサンタクロースの仕事である。

もちろん、他にも大切な仕事は沢山ある。

例えば、トナカイの育成。一人に八頭与えられるトナカイは空を飛ぶために必要であり、また長い距離を走る事になるのでしっかりと育成する事が必要となる。

他にも、後継者の育成や、ソリの整備などがあるが、最近問題になっているのが資金についてだ。

プレゼントを買う費用はもちろんの事、自分たちの生活費、トナカイの食費などには馬鹿にできないお金がかかる。

近頃の不景気の影響で、プレゼントの数は増えたが、その分のお

金が足りなくなるのも後数年だろう。

まあ、サンタクロースも最近は大変だ。

君はそれでもサンタクロースに憧れるのかな？

0042 まるで子供みたいだ

水面を覗き込んで見えた、10才に満たない少女の姿。それを自分自身だと認識するのに1分強。

納得していたのが2分弱。

そして違和感を感じて数秒。

驚愕。

「はっ？」

声も出ない。

たしか、俺の名前は……。

思い出せない。

いや、でも男だった事には違いない。

一人称が俺だから。

ガサツ

背後の森に積もる葉っぱを踏みしめた音がした。

サツと振り向くと、そこに立っていたのは……

「よ、よう」

「あ、ああ」

一人の少女だった。

目が覚めてから初めて会う人間に嬉しくもあつたが、どこか引っ掛かる。

まるで、以前にも会った事があるような。

向かいの少女は顎に手を当てて、大人びた雰囲気できている風

だ。

誰、だったかな。

「なあ」

「ねえ」

同時に話し出したが、相手がどうぞと続けて言ったので、俺は言
った。

「なあ、俺ら、どっかで会ってるよな」

「やっぱり君もそう思う?」

「あ、ああ」

何となく口調がおかしいが、しっくりくるものでもあった。
それにしてもこれは一体

「まるで子どもみたいだ」

突然、俺たちの間に入ってきた少女が、そう言った。

「君は?」

とその少女に訊くと、その少女はこう言い放った。

「私の名は……………」

「名は?」

「私の、名は……………」

一陣の風が通り抜ける。

「すまんが分からん。思い出せんのだ」

口調に違和感があったが、だがと続けられた言葉に耳を疑った。

「君達をここに連れてきたのは、私だよ」

一発殴りたかった。

「そして、私もその作用によって記憶を無くしたらしいな」

駄目じゃん。

「出ましたね、悪役さん」

長い黒髪を持つ少女と呼ぶには少々大人びた女子が、対峙する悪役に向かって言った。

「あな、何度言ったら分かってくれるんだ。俺の名前は」

「権堂無用です。成敗します」

「問答無用じゃあああつないのかっい！」

悪役の言葉を最後まで聞かずに、女子は淡々とどこから取り出したのか弓に矢を番えては放ち、悪役を追い詰める。

「そんなこと知りません。ともかく、私の餌食になりなさい」

「そんな〜」

へたれながらも的確に矢を避ける辺り、悪役も流石である。

「ちょっと作者、何書いてんのよ」

「俺が如何に素晴らしっいか」

「避けるな、悪役」

最早呼び捨てである。これ則ち、恋。

「作者、何か言ったか？」

（何でここに矢が！？）

何も言ってますん書いてません。

「なら、いいんだがな。で、悪役。これからどうしてほしい？」
「キャラが変わってる……」
「ほほう、みじん切りにされる玉葱の気分を味わいたい、とな」
「言ってますん言ってますん」
「よし分かった。そこから動くなよ」
「分かってないし〜」
「少しでも動いたら、玉葱じゃあなくなるからな」
「作者さ〜ん、助けて〜」

(無視)

「え〜」

「さあ、始めるわよ。準備はいいかしら」
「何かまたキャラが変わってる気がするのには気のせいかな」
「良いようね。それじゃあ、始めるわよ」

……………。

「ギャー」

「逃げたらお仕置きよ」

「ギャー」

See you again

「まだ続くの〜〜!?!?」

0044 Dejavu

「ああ、悪役さん、じ常人に勝負です」

ピンクのドレスを着た少女がヘッピリ腰に、対峙する悪役に向かって、手に持った先端にハートの付いたステッキを向けている。

「何か前にも似たような事が」

「き気にしない事です。ただのDejavuですから。一つま前の話を読めば一力寮生です」

「そ、そうか。というか、尋常と一目瞭然だと思っただが」

「き、気にしないです。怒りますよ」

「はいはい、どうぞ」

途端にパねえ魔力を放出しだす少女。

「作者さん、年齢、バレるよ」

は、はあ。

「どうかしら、怒った私は。魅力的？」

「ここは以前の事を役立てましょう。

この前はキャラの事を言った

「作者はお黙りなさい。で、どうなの」

「ええっと、は、はい。十二分に魅力的です、はい」

「そう、それはよかったわ」

「はい……」

「魅力的な女性には、どうしてほしいかしら」

「そ、それは」

「そうよねえ、サンドバッグの気分を是非とも味わいたいでしょ
ねえ」

「お、俺は何も」

「お黙りなさい。はあ、作者は何をやっているんだか」

(熟睡)

「まあいいわ。それじゃ始めましょうか」

「ギャー」

<しばらくお待ち下さい>

「全く、作者は何を書いているんだか。せつかく私が大活躍したっ
ていつのに」

.....

「まあ悪役はた退治できましたので、ほ報告しないと。.....はい、
はい。悪役さんは、無事に退治できました。はい。はい。はい。はいっ
」

0045 貴方に逢えたことを 後悔していない

「月は満ち、星は瞬き、空と地は其の全てを包み込み。天に揺蕩たゆたう幾万のマナを司る者、その力、我に与え賜う。然るべき時、我は其の僕と成り、全ては無に帰す事を是に誓う。シングルイス、起動」

彼女と話せるのは今からほんの僅かな時間だけだ。だから。

「じゅん」

今まで何度も謝ろうかと思った。

でも僕は、もしかしたら彼女が断るんじゃないかと尻込みして、言えなかった言葉。

「ううん、大丈夫だよ」

「大丈夫じゃないよ。駄目、駄目なんだよ」

微笑む彼女に、胸が痛くなる。

自分の計画に巻き込んでおいて、今更かもしれない。

否、だからこそ、気付いた。

「僕は」

「もう、時間みたい。貴方に逢えたこと、後悔していないから」

彼女は、これから自分が消えても

「嬉しかったよ」

その体が透き通り始めても

「楽しかったよ」

それでも

「本当に」

いつもの儂げな笑顔をしたまま

「貴方が」

言葉だけを残して光とともに

「好きだった」

何も言えない僕を置いて

「バイバ…イ……」

暗闇。

ここはどこだろう。

柔らかい感触が体を包み込み、このままでいたい気分だ。

「……え、起きよ」

誰かの声、そう、僕が巻き込んでしまった彼女の声が控え目に聞こえる。

「もう朝だよ」

そして僕が

「つて、ええっ！」

「ななななに、どうしたの」

ジッと彼女の顔を見る。

.....

ああ、そうか。

「夢か」

夢でよかった。

でも

「もう、驚かせないでよね。朝食の準備、できてるから」

「うん」

いつもの儂げな笑顔を見ると、謝る事はできなかった。

0046 生きているみたいだね。

箱庭。

そんな名前通りの玩具がある。

縦幅30cm、横幅40cm、高さ20cmで、天井にあたる面以外は全て薄い板で覆われている。

その中には二つの小さな人形と家や庭、そして家の中には様々な家具が配置されて、一つの家を模している。

それが、箱庭。

そう、ただの模型であり玩具であり、そして“作り物”でしかない。

「生きているみたいだね。この中の人形」

箱庭の中を覗き込む少年が、後ろに立つ兄に向かって微笑みかけた。

「なかなかよく出来た人形だろ。触ってもいいぞ」

「本当に！」

少年は顔一面に笑顔を湛えると、箱庭の中を動き回る人形の一つに手を伸ばした。

そしてそれを掴み上げる。

逃れようとするとする人形とそれを助けようとするとする人形を見て、少年は面白くなった。

無邪気で無垢な少年は人形をこねくりまわし、その内に人形はポロボロになってしまった。

もう一つの人形に手を伸ばそうとした少年だったが、いつの間にかその人形は動かなくなっていた。
しばらく少年は見ていたが、興味がなくなったのか箱庭から離れていった。

「 が殺害されているのが発見されました。警察によりますと、死因は外傷性ショック死とみられており、彼女の全身には複数回に渡って痛めつけられた痕があったそうです。一緒に住んでいた彼女の姉」

少年が一泊して帰った後。

「 現在行方不明となっており、警察では姉が事件に何らかの形で関わっているとみて捜索を続けています。次のニュースです。大手金融グループ各社は、政府に対し早急に」

兄は唯々笑っていた。

0047 ふかふかの布団で 君と眠る

推薦選挙制、正式には非立候補式小選挙区制が確立されて大分経つ今日この日、任期を迎えて解散した議会の議員を選出する為の選挙が行われる。

政治家不信が続くのを打開しようと、一人の有名大学の教授が推薦制を提案し、マスコミはこれを取り上げた。

その内、立候補制のデメリットと推薦制のメリットのみがマスコミによる過剰報道により国民に植え付けられ、渋々ながら公職選挙法が改正されたのが数年前。

そして今日は通算3回目の推薦選挙日という事になる。

推薦選挙制の内容は単純だ。

政治家になってほしい人の名前をコンソールに入力し、投票するボタンを押せばいいだけだ。

結果は自動的に集計されて、翌朝、公表される。
当選した人は、特別な理由が無い限り議員となる。

翌朝。

もうこのふかふかの布団で君と眠る事はないかもしれない、などという下らない妄想をしてしまった。

否、妄想でなく、可能性だ。

布団から起き上がると自動で照明がつき、隣で恋人が寝ているのが確認できた。

「コンピュータ、新着メールある？」

『新着メール、一件、重要度、5』

.....。

「もう一度繰り返し返して」

『新着メール、一件、重要度、5』

聞き間違いではなかった。

重要度5。

つまり政府や軍部、裁判所などから送られる物。拒否は出来ない。

「前置きを飛ばして、読みあげて」

『先日行われた第156選挙区の投票に於いて、貴公の得票数が最も多かつたため、ここにその旨をお伝えするものである』

妄想が、現実となってしまった。

『このメール開封以後、6時間以内に役所に出頭し、諸々の手続きを済ませなければならぬ。但し、公職選挙法第56条第2項に定められている場合に限り辞退が認められるが、その場合も手続きが必要となる。万が一、6時間以内に手続きが始めていない場合は、公職選挙法第61条に定められた通りの罰則が適用されるので注意せよ。また』

0048 安心して眠れ ずっと傍にいるから

少年が一人、倒れていた。

服装からだけで少年が国立魔導師部隊の見習いである、と判断できた人が通りかかったのは少年には幸運としか言えないかもしれないなかつた。

「大丈夫か？」

そう少年に問いかける青年は、盗賊でも追剥でもなく、こんな戦時にも拘らず一人で旅をしていた。

「……あ、つた……い……」

「まずは水を飲め」

目を開いて何か喋ろうとした少年を見て、青年はホツとした。

今の時代、こじきの振りをした子供はあちこちにいる。まさか国立魔導師見習いの少年がそんな事をするとは思わないが、事実そうでなくてよかつた。

まあ、そんな暇も無かつたと思うが。

「大丈夫か？」

青年が同じ質問をすると、少年は頷いた。

「そうか。俺の名前は、んまあ、自己紹介は後だな。君は？」

分かつた上で青年は訊いたが、見習いとはいえ流石は国立魔導師だ。訊かれた事をすぐに理解した。

「私は国立魔導師第24部隊見習いです。国境付近での戦闘中、敵軍の増援により当部隊は壊滅。私のみ、援護隊員によりこの場に転移したものと推察されます」
「そうか」

こんな少年まで前線に送られる戦争になってしまったか。
少しだけ無念感を漂わせた青年は、少年が瞬きを頻繁にしている事に気付いた。

そして、疑問はすぐに口をついた。

「眠い、のか」

疑問、ではなく確認。

少年はそれに頷き、青年を見た。

「安心して眠れ。ずっと傍にいるから」

この言葉は本当だ。故に青年は『鬼喰い』と呼ばれている。
少年は頷き、そして目を閉じた。

「」

少年の口から溢れた言葉は、風の音に掻き消されて聞こえなかった。

0049 そんなに見つめられると僕だって照れる時はあります。

今日は生徒会役員選挙の立候補者演説会。

昼休みを過ぎたこの時間、ほとんどの生徒が今か今かと候補者の登場を心待にしていた。

反対に、心待にされる側は落ち着いていられない人がほとんどだった。

そんな中で、一際落ち着いている生徒がいた。

その生徒に現生徒会長は声をかけた。

「余裕ね」

「いえ、書記をやっている時も大勢の前で話した事はありますよ」

「でも、その時は主役じゃあなかったでしょ。今回は次期生徒会長候補なんだから、注目の的よ」

そう言われてその生徒が手をソワソワさせ始めたのを見た生徒会長は、クスリと笑った。

「あなたでも、そうなる事があるのね」

「当然ですよ。そんなに見つめられると僕だって照れる時はあります」

生徒会長はしばらく口を半開きにしていたが、その内に紅潮してきた顔を両手で挟みこみながらうつつ向いた。

無事生徒会役員選挙（という名の信任投票）も終わり、今、生徒会室では新旧両役員が歓迎会と送別会を兼ねて、パーティーが催さ

れていた。

「生徒会長就任おめでとう」

「ありがとうございます」

心臓に毛が生えたような生徒は、生徒会長に会釈をした。

「明日から頑張ってるね。何かあったらいつでも相談に乗ってあげるから」

「はい。ありがとうございます」

そう言って立ち去った生徒会長と入れ違いに、別の生徒が話し掛けてきた。

「生徒会長就任おめでとう。壇上のあなたは本当に格好良かったよ」

「僕、格好良いって言われるの、嫌いんだけど」

「別にいいじゃない。今の時代、男が可愛いって言われるのよ。女が格好良いって言われてもおかしくは無いわ」

頬を膨らませる次期生徒会長だった。

0050 せめてこの時だけは安らかな時間を君に

「あ、会長み〜つつけたつ。どうしたの？」

「いや、仕事が一段落ついたから、クラスで休もうかと」

「そうなんだ。文化祭中もほとんど休んで無いよね。今の時間ならそんなにお客さんもないし、ゆっくりできるよ」

「そうか。それは良かった」

「みんな〜、会長が帰ってきたよ〜」

「お帰りなさい、会長」

「お帰り〜」

「ただいま。繁盛してるみたいだな」

「う〜ん、そうだね。あ、あっちの隅の席が空いてるから、そこで待ってて」

「ああ、分かった。紅茶をつて、聞いてないな」

「か会、いえ、ごっご主人様、おっ帰りなさいませ。ごっご注文は何にいたしますか？」

「そうか。それならば、紅茶をストレートで頼む」

「はひい。こちらのラスクは、い、いかがでしょうか」

「お勧めはあるか？」

「このめ、メイプル味は紅茶によく合う、とっつと評判でごっごいます」

「それで頼む」

「かつ、かしこまりました。少々お待ちください」

「で、君はさっきからなぜ私の対面に座っている？」

「ダメ？」

「い、いや、駄目ではないが」

「会長とごっごして相席する事が、ボクの夢なの」

「なぜボクなのだ」

「え？」

「いや、そんな心底不思議そうな顔をされても、だな」
「ダメ？」

「い、いや、駄目ではないが」

「お、お紅茶つとらす、ラスクおっ、お持ち致しまあっ！」
「アチツ！」

「お、ご主人様、ただ大丈夫でございますか？ たっ只今代わりをお持ち致しますね」

「会長、ボクはこれで失礼するよ」

「お、おい」

「さすがの会長も、ドジツ子メイド喫茶がここまでとは思わなかったのね」

「当たり前だろ。普通客に紅茶をかけるのか？ それともこれは私の認識が間違っているのか？」

「後者ね」

「さらつと酷い事を」

「まあいいじゃない。この店のコンセプトは『せめてこの時だけは安らかな時間を君に』なんだから」

「悲惨な、間違いでは」

「気のせいよ」

0051 密やかに 穏やかに 彼らと歌う鎮魂曲

鎮魂曲。

それは、霊滅師の中でも天師という職の者しか扱えないと言われている、最高等技術。

町内で突然発生した大量殺人の犯人達を見付けた霊滅師の一人は、彼らがその鎮魂歌でもって、生きている人間の魂すら冥界においていた、という事実に関心する。

「何を」

彼はそれ以上言葉を吐く事もできずに、その場に倒れた。

一人の霊滅師の死と引き替えに得た、犯人の情報。それを基に、一組の少年少女が現場に向かっていた。

「煩いね」

「ああ、レクイエムと違って鎮魂歌は、こう」

「直接魂に触られてるみたいだよ」

「だな」

お喋りをしつつも、確実に犯人との距離を縮めていく。

「それじゃあ私はここで結界を張ってるね」

「頼んだぞ」

少女はその場に立ち止まり、詠唱を始めた。

少年はその目で、犯人が5人である事を確認した。手前のから時計回りにABCDEとする。

全員がランク6と大した事は無さそうだが、と少年は判断し、一気に距離を詰める。

犯人の一人が一瞬だけ少年に気が逸れたその時、犯人達の周囲200m程に結界が発生した。

「お前は誰だ！」

「そつちこそ！」

少年はそう叫びながら、Aを素手で吹っ飛ばす。

もう既に鎮魂歌は鳴っていない。

続けざまにBを殴ろうとするが、後ろからEの拳が迫っていたので一度しゃがみ込み、BとEを両手でそれぞれアッパーした。

軽そうなBを、宙に浮いた状態から強制的に右方向に引っ張り、Dにぶつける。

そして残るCに足を運ぶが、

「残念だったな」

言ったEが少年の足首を掴んでいて、動く事が出来なくなった。

Cはその間に詠唱を終わらせようと、最後の一句を唱えようとする。

少年はその場から逃げるため、足首を掴んだEごと宙返りで後ろに大きく跳びさった。

少年が着地する、と同時にCは詠唱を終了し、そして放つが。

ドオオン

どこからか飛んできた光線によって、少年の足下から10cmだけ離れた所までクレーターができていた。

Eは宙返りによって遠くに飛ばされていたからいいものの、他の4人は跡形もないだろう。

少年はその光線を放った主である悲しげな少女を遠くに見付け、微笑みかけた。

0052トランプを仕掛けて ほんの些細な戯れを

？

朝の教室。

いつもならば騒がしいはずのそこが、何故か静かだった。

担任の先生はその事に違和感を感じ、扉の前で立ち止まる。

数秒の逡巡の後、扉を開けた。それと同時に落ちていく黒板消し。

児童は、ホツとしたような、残念そうな溜め息を落とした。

？

黒板消しを拾い上げようと膝を折る担任の先生。

黒板消しに手を掛けた所で、細い紐が繋がっている事に気付いた。

そつと持ち上げて、様子を見る。何も起きない。

持ったまま一步教室に足を踏み入れると、上からの気配を感じて

横に転がった。

？

罫。

直径1M程のステンレス製。多分、MADE IN ****

だ。

どこに設置されていたかは分からないが、落下してきた。

しかも逆さまになっていて、中から何かが出てきている。

指先で触った担任の先生は、それが油かワックスの様だと思った。

？

油は床に広がっていく。担任の先生は教壇に急いで登った。と同時に、手に持っていた黒板消しに張力が働いた。気付いた時には上から物が落ちてきている。

担任の先生は急いで姿勢を低くして、側転の要領で横に転がった。

？

転がる先に画鋏が敷き詰められている。

上から落ちてきたのは、バケツとその中に入った小麦粉。

左右を画鋏と小麦粉に挟まれ、担任の先生は現状を確認する。

バケツが落ちる寸前、担任の先生は跳び上がった。

？

着地点は教卓の上。

何も無い平なそこに、担任の先生は着地する。

暫しの沈黙。バケツが転がる音だけが教室に響く。

カチッ

何かが外れる音がした。

？

教卓の上には、何も獲物を捕まえる事の出来なかつた虫取り網。
盥の上には、逃げおおせた担任の先生。滑らない様にバランスを
取っている。

今日も授業前の戯れは担任の先生の勝利だった。

授業の後、児童達は後片付けをやった。

0053 変化を 楽しもう

一時間目は理科の実験の授業だった。

「変化を楽しもう」

そうやって先生が手渡したのは、紫キャベツだった。

先生の手元には、紫色の液体の入ったビーカーが置かれている。

「この液体は紫キャベツの色素成分を集めて濃縮した液体だ。リトマス試験紙やフェノールフタレイン溶液、BTB溶液は先週の実験で使ったが、この紫キャベツ溶液もpHで色が変化する。今日は実際に紫キャベツから色素を取り出して、pHでどういった色に変化をするか、観察してもらいたい」

? 紫キャベツをしばらく煮て、色素を取り出す

? 紫キャベツを取り出して、溶液をしばらく沸騰させて濃縮する

? 溶液が大分濃くなったら火を止めて、冷ます

? 冷めた紫キャベツ溶液をスポイトで二本の試験管に5mlずつ入れる

? 試験管の一方には塩酸を、もう一方には水酸化ナトリウム水溶液を一滴ずつ垂らしていく

? 色の変化をその都度プリントに記入する

一滴垂らす毎に色が変化する紫キャベツ溶液に、生徒達は驚きの

声を上げた。

BTB溶液のようなはつきりとした規則性は見られないものの、逆にそれが面白い。

「それでは今度はこの液体をそれぞれに入れて観察してもらいたい」

そう言って先生が持ち出したのは、100mlビーカーに3分の1程入った無色透明の液体だった。

「これは一酸化二水素と呼ばれる液体だ。危険は少ないが、塩酸などと混ぜると危険だ。気を付けろ」

そして生徒はその一酸化二水素、つまり水を試験管に垂らしていき、色の変化を楽しむのだった。

0054 知っている？笑えるのは余裕があるからなんだって

「知っている？ 笑えるのは余裕があるからなんだって」

突然そんな事を言った女騎士に対して、ほとんどの騎士は訝しんだが、一人だけ堪えきれずに笑いだした子供騎士がいた。

子供騎士の行為を咎める視線があったが、子供騎士にしてみればそれは滑稽でしかなかった。

「いつから気付いていたのさ」

「ん〜。大分前。君がこの騎士団に入る時の試験で見せた動きが、似てたから」

だから子供騎士は敵国から送り込まれた密偵なのだろう、と。周りの騎士達はギョツとして距離を取り、そして武器を構えた。子供騎士はそんな事を気にした風もなく、女騎士に訊いた。

「ふーん。それで、今まで言わなかった理由は？」

「ん〜、証拠も無いし。第一、意味のない事ですよ」

子供騎士はしきりに頷いた。

「だね。まあ、しばらくは裏切らないから。安心していいよ」

女騎士はそれに頷くと、視線を戻した。

「ひっ捕える！」

敵陣最深部に入った途端、その言葉と共に四方八方から敵が襲いかかってきた。

予想していたとはいえ、流石にここまでの戦力を固めていた事は予想外だった。

初撃は何とか堪えたが、圧倒的な不利だ。

一人、また一人と倒されていく中で、女騎士は子供騎士が近くにいない事に気付いた。

敵の攻撃を時には受け、時には避けながら、その姿を捜す。そして。

「うがっ
」

突然倒れた敵の指導者。

その後ろには、子供騎士の姿があった。

敵が呆気にとられている内に、女騎士は素早く敵を拘束していく。

「彼は、敵ではなかったのか？」

仲間からのその解りにくい質問に、女騎士は端的に答えた。

「彼は二重スパイだ」

0055すべてを忘れて 今は笑おう

朝、毎週火曜日にある定例朝会。

恒例の校長の長い話から始まり、生徒指導部、生徒会長の話まで、話され続けて眠い話が更に眠くなる。

「どうしたの」

そんな中で

「すべてを忘れて、今は笑おう。ね」

何の事情も知らずにこんなことを言ってくる彼女は、嫌いだ。
そして何の事情も説明しない自分自身も。

彼女が悪い訳ではない。

悪いのは僕自身だから。

あの時不用意に頷いたのがいけなかった。

いや、全ての元凶は

「2年3組」

突然今までとは違った雰囲気になる体育館。

隣にいる彼女も驚いている。

呼ばれたのは僕。

その理由は

「彼を今日付けで生徒会外部協力機関『メサイア』の会長、つまり実質的なトップに」

一時ざわめいていた体育館は、布の擦れあう音だけが響く静寂に包まれていた。

生徒会長の声が響く。

『メサイア』の意味、意義、価値などを一通り話し終わると、僕に壇上にかかるよう指示がでた。

立ち上がり壇上へと向かう。

そして生徒会長と場所を替わった。

一度礼をして拍手が鳴り止んでから話し始める。

「まず始めに明らかにしておきたい事は、僕は『メサイア』が大嫌いだという」

もしかしたらこれすら言いなりなのかもしれない。

「僕は『メサイア』の構造改革を敢行し、この組織に革命を」

もしかしたらこれこそが狙いなのかもしれない。

「誓います。僕は新しくなる『メサイア』がきつと」

そんな自分が嫌いだ。

0056 あー痛い痛い。心がすごく痛い。

『あー痛い痛い。心がすごく痛い。なあ』

薄気味悪い作り物の微笑みを顔に張り付け、甲高い男の声を発する悪魔に抗議の視線を送るが、それはあっさりとかわされた。

まあ、かわされずとも無視されただろうが。

「どうしたの？」

「何でもないよ」

妹からの不思議がる視線に、笑顔を見せる。

つられて笑顔になる妹の頭を軽く数回撫でて、私は前を向いた。

「痛いのは、アイツらよ」

『ハッハッハ、それもそうだ』

相手は三人、こっちは実質一人だけ。

でもここは細い路地。

妹が（本人はそうは思っていないようだが）連れ去られたこの恨みは、重い。

「なに言ってるんだよ、嬢ちゃん」

「俺達に勝とうってか？」

「早く諦めた方が、お互い良い結果になるぜ」

息のあった三人は威圧するように立ち塞がる。

『無意味な事だよ、え。ホントによ』

「そうね。本当に無意味」

何だかアイツらが何か言っているようだが、私はそれを無視する。一人が襲いかかってきたが、私の丁度1メートル先で停止した。

運動方程式からも波動方程式からも逸脱した現象。残りの二人はそれを目の当たりにして逃げ去っていく。

私はそれをも無視して妹に話しかける。

「何で知らない人に付いていったの？」

「だってお姉ちゃんが大変だって言うから」

「最悪ね」

『ああ、最低だな』

「お姉ちゃん？」

「ん？ 何でもないわ。それより、早く夕食の材料買いにいかない
とね」

「うんっ」

振り向きもせず路地を後にする私と妹。

跡には何も残っていなかった。

0057 単純明快なゲームをしよう

「単純明快なゲームをしよう。ルールは簡単、死んだら負け、だ。この場で、全員が、一度に、闘う。どうだ、単純明快だろ？」

「ああ、分かりやすい」

「過単純」

「むくれるなよ、お嬢さん。すぐに終わらせることができるんだぜ」

「早く終わったほうが、嬉しいな」

「無駄」

何が無駄なのか。

男二人は少女の後ろ姿を苦笑と共に見つめながら考えていた。

「始めっ！」

それは一瞬の事だった。

「……消滅」

少女のその一言に、フィールド上にいた参加者のほとんどが消え去った。

残ったのは三人。

審判、少女、そして男。

審判は既に気を失っていた。少女が敢えて標的から外したのだから。

男は笑った。

「やるじゃねえか譲ちゃん」

「感謝」

男とは対称的に無表情な少女は、コクリと頷く事で返事をした。フィールドの周りの客席からは物音一つ聞こえない。更に外の市場からの威勢の良い声が、場違いに響いている。

「さあて、俺もいつちよやりますか。行くぜっ」

地を蹴った男は一瞬にして20mの距離を詰めた。

少女は驚いたように眉を僅かに動かすと、小さく言った。

「移動」

それと同時に少女は瞬時に上空に移動、静止した。舌打ちをする男。だがその顔は笑っている。

「仕方ねえなあ。余り好きじゃあ無いが。翼、解放」

その言葉に合わせて、男の背中から真っ白な二枚の翼が現れた。その翼が羽ばたくとフィールド中に突風がおこる。そして男は宙に浮いた。

どこか不思議そうな雰囲気を漂わせた少女に男は言った。

「気分の問題だ。実際のところ、意味はねえよ」
「理解」

一つ頷いた少女は、更に一言。

「封印」

突如、男の翼が掻き消えた。

だが、男はそのままの姿勢で立っている。

次の声は二人同時。

「さて、と。球体複写」

「予想。乱反射」

空中に突如現れた球体は、知覚する間もなく消えた。

大きな溜め息を吐いた男は、両手を挙げて言った。

「敗けた。殺せ」

「拒否。私達同一体」

少女が首を横に振る。

男は怪訝な表情をするも、すぐに笑って言った。

「俺を殺さねえと、勝てねえぜ」

「時空間転移式簡易法陣型無差別選択補助有移動系肉体借用逆召喚、発動」

言い終わると、フィールドには少女だけが立っていた。

漸く起き上がった審判が勝者の名を叫び、ゲームは終わる。

0058泣いても叫んでも 何も変わらないなら

1. しまいこむ

駄目。

駄目だ。

思い出したいが、それは自分を不幸にする。

二律背反する気持ちを含に押さえ付けて、僕は前を見た。

6組の左隣には8組が並んでいる。間の7組は始めからなかったのだ。

ちよつと不思議だが、まああることだろう。

これが日常なのだから。

2. おこる

「何で、何であんたは言い返さないのよ！」

「だ……だって」

「だって何も無いの。あんたのそういう態度が相手を冗長させてるの、分からないの？」

「……うん」

「分かってよ。私はね、私は」

「……」

「……嫌なの」

「え……？」

「嫌なのよ、堪えられないの。泣きたいのよ、叫びたいのよ」

「……」

「それをあんたが何もしないでいるから、私も何もできないじゃないの」

「……」

3・やっぱりなく

泣く事は簡単だ。

幼少の頃によく泣くのは気を惹くためらしい。

私は、どうしたいのだろうか。なぜ泣くのだろうか。

どうしようもないから泣くのだろうか。

それならば泣いていてもどうしようもないだろう。

だが、どうしようもないのだ。

4・にげる

お母さんとお父さんは旅行中です。

携帯が繋がらない所にいるのか、なかなか連絡がきません。

僕は一人でお留守番。

隣のおばさんが色々とお世話をしてくるので、何かと感謝しています。

でも、お父さんやお母さんの話をするとなぜそんなに哀しい顔をするのでしょうか。

喧嘩でもしていて謝れないのでしょうか。

5・うけとめる

死というものは誰にだって訪れる。例えそれが神であっても。

死には二種類あるという。物理的な死と社会的な死。

私は独りになったけど、まだどちらも死んではない。取り戻せるものだ。

また別のを選べばいいのだ。

そうすれば全てが元通りになるのだから。

0059 それなら僕にも考えがあるよ

「それなら僕にも考えがあるよ」

今は学級活動の時間なのだが、中々活動内容が決まらない状態だった。

そう言った生徒にみんなの期待が高まる。

「どんな？」

「ちよつと待っててね」

そう言つて教室を出ていく男子生徒。

しばらくするとその生徒は戻つてきてこう言った。

「かくれんぼをしよう」

そして籤引きの結果、気弱そうな男子が鬼となった。

他の生徒がぞろぞろと校舎中に散つていく中、男子は時計と睨めっこをしていた。

『E1より本部、ただいまターゲットはA棟一階を歩行中、間もなく西階段より二階に行く模様です、どうぞ』

『E1は引き続き監視を続けて下さい、どうぞ
了解』

『本部より各員に次ぐ。ただいまより作戦コードをCに変更する
了解！』

『J班行動を開始します』

『こちら本部、J班行動開始、了解です。気を付けて』
『E2より本部、ただいまターゲットはA棟二階東階段より三階に到着、西階段で四階に行くようです、どうぞ』
『暫くE2はその場で待機、ターゲットが戻って来たら連絡を、どうぞ』
『E2了解、待機します』
『J班より本部、ただいま第一段階終了、第二段階に移行します、どうぞ』
『予行演習通りにな』
『了解』
『本部、T班行動開始します、どうぞ』
『こちら本部、T班行動開始、了解』
『E2より本部、ターゲットが西側よりB棟に移動します、どうぞ』
『了解。E2はE1と合流、T班の援護を頼む』
『E2了解!』
『E1了解』
『こちらE3、ターゲットがB棟三階に侵入、間もなく東側より二階に向かいそうです、どうぞ』
『引き続き監視を続けて下さい、どうぞ』
『了解』
『T班より本部、任務完了しました。J班に合流し引き続き任務に当たります、どうぞ』
『T班任務完了、お疲れ様』
『J班、第三段階に移行した』
『こちら本部、第三段階に移行、了解』
『E4より本部、現在ターゲットはB棟一階を西から東に移動中、間もなく東側よりA棟に移動する、どうぞ』
『E4、E3と共にJ班に合流、その後作戦コードDに移行する』
『了解!』

気弱そうな男子は一通り校舎を回ったが、誰一人として見付けられずに、落胆気味に教室に戻ってきた。

扉を開ける。

するとそこには大きなバースデーケーキが鎮座していた。

「『ハッピーバースデー』」

0060えへへー、秘密なんだよ

「では、今日はまず転入生を紹介します。どうぞ入ってきてください」

朝8：40の学校。

教室中の視線が、ゆっくりと開かれていく扉に集中する中、そこから一人の美少女が現れた。

身長140cm前後、膝まで届く緩やかなウェーブのかかった金髪、整った顔に青い瞳、ほっそりとした色白の手足、大きめのだが大き過ぎることのない胸。

美しい、というよりは純真無垢という方があっていられるかもしれない。

男女を問わず好奇や羨望の眼差しを向けられているにもかかわらず、さもそれが当たり前前でも言いたげに先生の隣まで歩く美少女。

「それじゃあまずは簡単な自己紹介をお願いしますね」

先生のこの言葉に、クラスの全員が息をのんだ。

美少女から発せられる第一声に期待が募る。

時計の秒針が刻々と動く以外はまるで時が止まってしまったかのような雰囲気にも包まれる。

隣のクラスからの騒ぎ声が一層このクラスの静寂をどこか神秘的なものにしている、その中心に美少女はただ立っていた。

誰かが咳をする。

集中がほんの僅かだけ途切れ、全員が座り直したり緊張した腕や手を伸ばす。

さっきまで止まっていた空気が動き出したかのように、呼吸が楽になった気がする。

その流れで美少女が息を吸い込んだ。
教室内の緊張感が最高潮に達し、誰もが美少女の口を凝視している。

「ええと」

それだけを言ってもじもじし始めた美少女に、男女問わずに顔を赤らめる。

両手を背中で組みつつ向いたまま片足で立ち、反対の足をブラブラと揺らした。その姿は海辺で恋人と一緒に夕焼けを眺めているようだった。

そしてしばらく経ってから、小さく鈴の鳴るような声でこう言った。

「えへへー、秘密なんだよ」

0061ずっと傍にいてね 離れたくないんだ

金のガチヨウといっただろうか。

とある少年がそのガチヨウに触れると離れなくなり、さらにその少年に様々な人がくっついて大変な事になる、という童話だ。

細かい設定とかは忘れてしまったが

コケコッコー

今の状態を端的に表しているだろう。

事の始まりは登校中だった。

俺は住宅街の中心、車が一台通れる程の細めの道路を走っていてな。

寝坊、そして妹が中々起きなかったせいで、こつやって普段なら通らないであろう場所に行く事になっていたんよ。

妹は関係ないって？

.....。

確かに、関係ない。

でだ。

とある交差点に差し掛かった時だった。

俺は見てしまった訳だ。うん。

そう、ひよこがヨチヨチと道を渡っている姿を。

まあ普通なら素通りするわな。俺もそうした。

だがな、何と無く振り返ってみると、そのひよこが凄まじい速さ

で俺を追い掛けてくるんよ。

そりゃあもう言葉では表現できないくらい凄かったぞ。

でな、学校に着いて、流石にもう追ってこないだろうと思って振り返ると、案の定いなかったわけよ。

この時の嬉しかったのなんのつて、偶然近くを通りかかった生徒の肩を叩いちまった。

するとどうしたことか手が離れなくなった。あの時は本当に焦ったな。

で、背中に違和感を感じてその生徒に聞いてみた。

そしたらひよこがくつついてるって言うだろ。

冗談かと思っただぜ。

ずっと傍にいてね。離れたくないんだ。

そう、僕は言った。

本当に何気無くとある有精卵に語りかけた事があった。

いつの間にか卵は消えていて、少し寂しかったけど、自由研究の題材を新しく探し出さないといけなかったからすぐに忘れてしまっていた。

『遂に彼の背中にくつついた鶏が卵を産み落としました。科学的にも貴重な資料となるだろう卵を、研究員の方でしょうか、慎重にケースにしまいこみます。この卵によって彼らに平穏な日常が戻ってくることを願って止みません』

少し興奮気味のアナウンサーの声に、まさかな、と頭を振った。

0062夢で会いましょう

私は兎に角走っていた。

アレに捕まってはいけないと、本能が警告を告げる。

だが私はこの場所に詳しくはない。どこに向かえばいいのかも分からない。

幸いなことに、アレも詳しくはないようで、回り込まれることはなかった。

見えないが、そこかしこにあるらしい死体が私の恐怖を煽る。

目線を反らそうと空を見上げると、それが存在していないことを思い出した。

と同時に自分が宙を飛べることも思い出し、地面を蹴った。

遠くを大きな虹色の鳥が舞っている。

それに合わせるように体を動かすと、心にゆとりが生まれる。

目線を下に向けると、アレは飛べないのかただじっとしていた。

『夢で会いましょう』

そう言われた気がしたが、私の意識はいつの間にか闇に包まれていた。

小鳥の鳴き声に目が覚める。実際はそれに似せた電子音のだが、寝ている間に汗をかいていたようで、パジャマが湿っていた。

時刻を見てまだ時間があることを確認し、ゆっくりと着替えながら夢で見たことを振り返る。

最後にアレが言った言葉が頭の中で繰り返され、なぜだか落ち着かない。

今は夢じゃあないのに。
着替え終わり、朝食も食べ終わったので、早めに家を出ることにした。

鍵を締める。

『見つけた』

突然、全身が硬直した。

アレだ。

首を巡らしてアレの存在を確認した私は、脇目もふらずに駆け出
した。

0063 夢で見たんだ。君が泣いてるのを

「どう、して？」

彼女の第一声がそれだった。

僕は雨に濡れた彼女をそっと引き寄せて、傘の中に入れる。

「どうして、かな」

僕はじつくりと言葉を選ぶ。

「昨日の夜にね、夢で見たんだ。君が泣いてるのを。だから」
「ばかっ」

そうやって彼女は僕に抱きつき、顔を上に向けた。

その顔は、雨とも涙とも判別がつかない位に濡れていた。

「遅いのよ」
「ごめん」

ポケットからハンカチを取り出して、顔を拭いてあげる。

目を閉じてされるがままの彼女が愛しく、僕はその唇にそっと

「おにーちゃん、おねーちゃん、雨だから濡れちゃうよ？」

慌てて顔を離し声のした方を見ると、黄色い傘をさして真赤なランドセルをしょった女の子が立っていた。

違和感を感じて周りを見ると、開いた傘が地面に落ちている。

いつの間にか手放してしまったらしく、僕と彼女に雨が直接降り

注いでいた。

慌てて傘を拾い、軽く水を切ってからさし直すと、女の子は満足したのか走ってどこかに行ってしまった。

その姿に自然と笑みが溢れる。

「ばかつ。浮気はダメだよ」

こつんと胸に拳が押し付けられそれ見ると、彼女が僕を睨んでいた。

「い、ごめん」

謝ったが彼女はまだ睨み続ける。僕もじつと見つめ返す。

その内に全身が冷えていることに気付いたので、空いている手を彼女の手と重ね合わせた。

「帰ろうか」

「……うん」

どこか不満足そうな顔をしたままの彼女に雨が当たらないように、傘の位置を調整した。

0064 冷たい雨が止まないね。…誰が泣いているのかな

「冷たい雨が止まないね。…誰が泣いているのかな」

隣を歩いている彼女が呟いた。僕は透明な傘を通して空を見上げる。

灰色の雲が一面に広がり、雨が止む気配は全くなかった。

「どうだろう」

そう言うと、彼女の手を握っている手に痛みがはしった。彼女を見ると、僕を睨んでいる。

「う、ごめん」

「何に謝ったのかな？」

少し僕よりも背の低い彼女は、背伸びをして顔を近付けてきた。そしてそのまま唇同士を軽く触れ合わせるとすぐに離して元の姿勢に戻った。

「あ………」

一瞬だけ見えた彼女の目尻はキラキラと光っていた。傘を落としそうになるのに気付き慌てて持ち直す。

そのまま歩き出す彼女に雨が当たらないように、僕も少し駆け足になりながらその後をついていった。

ジリリリリ

目覚ましの盛大な音に目が覚めると、カーテン越しに太陽の光が降り注いでいた。

「ふあ〜」

そう口にしながらか伸びをしてベッドから下り、カーテンを開けた。眩しい日射しが体の正面から当たり、僕はもう一度伸びをする。もう梅雨明け、かな。

そう思わせる位に昨日までとは打って変わって雲一つない空だった。

昨日の彼女の言葉を思い出す。

『冷たい雨が止まないね。…誰が泣いているのかな』

この空ならば、きっとその誰かは泣き止んで笑っている事だろう。

ルルルルル

枕元に目覚まし代わりに置いておいた携帯が着信を知らせるメロディーを奏で始めた。

誰かさんからの電話かな。

誰からかの電話が確認せずに通話ボタンを押すと、誰かさんは開口一番こう言った。

「それで、何で私に謝ったのかしら？」

0065 もう一度笑って それからキスをしよう

昔、画像認識技術のめざましい進歩により、笑顔になると自動でシャッターが切られるカメラがあったそうだ。

今では、良いと思っただ前1秒、後0.5秒が0.1秒間隔で自動で保存されるようになっていたものがある。

それなのに

「もう一度笑って、それからキスをしよう」

こう言ってくるのはどうよ。

つまりは私が笑顔にならないと彼はキスの一つすらさせてくれないのだ。しかもその笑顔の判定基準が非常に厳しいらしく、ここ何年もお預けだった。

いつの時代だー！

と叫びたくなったのも両手で数えられない程（1024回以上）だ。

だが見た目が私の好みであり、また滅多に手に入れられないものだから、手放せないでいる。

「まだそんな彼氏と付き合ってるの？ いい加減新しいのを見付けなよ。その方が絶対いいって」

と友人達は言う。

だけど私は彼とキスをするために付き合っている訳ではない。決して。

勿論そうだった事を期待していない、という嘘にはなるが。

「どこに行こうか」

私の手を取り、人混みで流されそうだった私を引き戻しながら、
そう聞いてきた。

そうだな。

ここナナウランドには本当に沢山のアトラクションがあって迷う。

「じゃあ、あのお化け屋敷に行こ」

そう言ってみると、彼の顔から血の気が無くなっていく。

「そ、そうだね」

男としてのプライドか、はたまた何も考えられなくなったのか、
彼は顔いて江戸時代の人の歩き方を真似ながらお化け屋敷に向かっ
て歩き出した。

私は笑いを堪えながら、その後を小走りに追いつけた。

0066君らしくもない そんなプライド捨てちゃいなよ

君らしくもない。そんなプライド捨てちゃいなよ。

彼女が囁く。

彼女に格好いい所を見せるチャンスだよ。ファイト。

天使が囁く。

逝くも後悔逝かぬも後悔。ならば逝かぬは損ではないか。

故人が囁く。

当たって砕けるだ。まあ本当に砕けたら意味ないが。

友人が囁く。

行ったら戻れないんだよ。別のにしようよ、ね。

子供が囁く。

やってみないと何も変わらないが、やっても変わらない事もある。

師匠が囁く。

意地は周りの迷惑に、プライドは周りの嫌悪に。

先生が囁く。

人は簡単には変わらない。だから受け入れようよ。

親友が囁く。

理由が無いならやるな。やりたければ理由を探せ。

上司が囁く。

結果が同じなら、楽をしようではないか。

悪魔が囁く。

確率は半分。どっちも似たようなもんだよな。

村人が囁く。

余は気にせん。好きなだけ選ぶといい。金はある。

王様が囁く。

本当にそれしか出来ないのか。よく考えてから行動に移せ。

剣士が囁く。

世の中、欠点の無い男っていうもんは意外と好かれないものです。

嘶家が囁く。

終りよければ全てよし、とはいかないのが人生です。

講師が囁く。

本人は失敗を永く憶えているが、周りは直ぐに忘れる。

隣人が囁く。

失敗したくないなら危ない橋を渡るな。対偶も又然り。

老人が囁く。

些細な選択が大きな変化をもたらす、つまりバタフライ効果。

学者が囁く。

0067 胸の奥にある 傷が痛んでたまらない

「それでは、麻酔を射ちますね」

ベッドに横たわる僕は、そう言ったお医者様の顔を見て瞼を閉じた。

一拍後。

瞼を開けるとお医者様はもう既にそこにいなくて、代わりにいた看護師さんが声をかけてきた。

「お疲れ様。手術はもう終わったよ」

「え、もう?」

「そうよ。ちょっと先生呼んで来るね」

そう言って看護師さんは廊下に出ていった。

目を閉じて開ける、という一秒も無い時間にどうやって手術をしたのか疑問に思ったが、前にお医者様から言われた事の中にあっただような気がした。

窓から外を眺めると、さっきまで真上にあっただはずの太陽はその姿をビルに半分くらい隠していた。結構な時間が経っていることが分かる。

所で、何だか胸の辺りがムズムズする。

腕を動かそうにも麻酔がまだ効いているのかほとんど動かないので、その痒みに甘んじるしかない。

凄く嫌な感じ。

扉が開いて、お医者様と看護師さんが入ってきた。

「ご苦労様。手術は無事成功したよ。ご両親も直ぐに来るそうだよ」
「そうですか。それよ」

激痛。

痒みが突然痛みに変わった。それも尋常じゃないくらいの。
多分胸をナイフで刺されたらこんな感じなのだろうか。
僕は今までの短い人生の中で最大音量の叫び声をあげた。

「つていう夢を見たんだよ」

と僕は言った。

「ふん」

聞き手はそれだけを言って去っていった。

0068 お気に入りのプリーツスカート

とあるマンションの一室、男性の遺体が発見された。

男性はスーツに何故かピンクの襷付きスカートをはいて、寝室のベッドで胸をナイフで一突きされた状態で亡くなっていた。

死亡推定時刻は昨夜の7時前後。同日夜7時10分頃に高校生らしき女性の人影が目撃されていることから、この女性が事件に関わっているとみて目下捜索中。同時に、男性の関係者への事情聴取も行う予定だ。

「ええ、ある意味では、違うかな、誰が見ても彼は性癖が変わっていました。出勤時は余り感じられませんが、会社帰りに少しでも飲むと、性格がガラリと変わりました。他の人も同じ事を言っていると思いますけど、彼、スカートフェチなんです。それも極度の。ある時彼の家に行った事があつたんですけど、もう驚いたの何のつて、スカートが所狭しと並べられていましたね。ああ、すみませんそれで彼に訊いたことがありました。そしたら彼はスカートを一枚一枚手に持つて説明を始めて、その説明が朝まで続く事も多かったですね。ああ、こんな事もありました。一ヶ月位の前の事ですが、彼と一緒に飲んでいた女の子のスカートを外そうとしまして、流石にこれは止めましたがこれ以降、彼に飲ませないようにする事が私達の間の不文律になりました。所が最近お気に入りのプリーツスカートを見つけたと言つて喜んでいたので、今度それが手に入つて。何だか気味が悪かつたのでその時は直ぐに流したんですが、もしかしたらあのスカートが彼のお気に入りだったのかも知れませんが、彼はどんな気持ちだったんでしょうかね」

0069 出会ったその日に 恋に落ちた

浮かれている親友に声をかける。

「どっした？」

すると親友は満面の笑みでこう答えた。

「出会ったその日に、恋に落ちた」

恋ね。

「そうか」

「それだけ？」

頷く。

「……………ジーツ」

わざわざ擬態語を口にしなくてもいいと思う。
何となく申し訳ない気がしてきた。

「それで、誰なんだ」

「君」

親友はじつとこっちを見る。

「君しかいないよ。それ以外にどんな候補があるのさ」

確かに、候補は無い。
無いが。

「出会ったのは大分前だったような気がするが」
「ずっと好きだった」

何で今更？

「男、だよな」

「そう僕は男さ。性別なんて問題ではない」

人に因るような。

「じゃ、じゃあどこが好きになったのかな」

「全て、そう君の全てさ」

具体的には？

「人質と犯人が仲良くなる、っていうやつか？」

「好きだーーーーー！」

そんなに叫ばなくても聞こえる。

「女の君が、大好きだーーーーー！」

はあ。

「結果は如何でしたか、博士」

「まあ、上々だ。あの二人なら仲良くやっているよ。こちらが嫉妬する程にな」

「では」

「ああ、環境で与えた事に疑問を持つのもあと少しだろう」

「そうですね」

じっとモニタを眺める助手は、ふと思い出したかのように他の電源のついていないモニタを見て訊いた。

「他はどうでしたか」

博士は苦笑したあと、淡々と言った。

「死んださ。予想通りな」

0070 僕の知らない君を見るたび　どんどん好きになっていく

「ひつろいすねー」

「そっだねー」

ここは夏の北国。

そこを南北に突き抜ける道路を、一台の紺色のオープンカーが北に向かって走り抜けていく。

助手席に座る彼女は一つ伸びをして、運転をしている彼に聞いた。

「先輩は以前にもここに来たことがあるんですか？」

「3年前だったかな」

「へー、修学旅行ですか？」

道路は草木が青々と生い茂る草原の真中を貫いている。

「いや、大学だったかな。サークル仲間と春休みに来たんだよ」

「へー」

しばらく二人は無言になり、車のエンジン音と風の音だけが辺りに響く。

ヴーヴー

突然聞こえてきた音に、彼女が首を傾げた。

「これはね、道路が鳴っているんだ」

「えっ？」

「よく見てごらん。溝が何本もあるでしょ」

絶えず続く音を聞きながら見ると、横向きに何本も黒っぽい線が等間隔に引かれていた。

間隔が変わると、音も変わるようだ。

「面白いですね」

「だろ」

音に耳を傾けていると、それがメロディーになっている事に気付いた。

彼女はそれを口ずさみ始めた。

歌詞も知っていたようでハミングはいつの間にか歌声に変わり、目を瞑って胸に手を当てている。

「上手いね」

「ありがとうございます。これでも高校生の頃は合唱部だったんですよ」

感心する彼に微笑んだ彼女は、また歌い始めた。

そんな彼女に、彼は小さく呟く。

「僕の知らない君を見るたびに、僕は」

何かを言いかけた彼は口を閉じ、彼女の歌声に耳を傾け続けた。

0071 そんなのじゃ足りない

近海の洞窟。

地元の住人や盗賊達からそう呼ばれるこの洞窟は、その名の通り海のすぐ側に存在する。

「お頭、本当に行くんですかい？」

髪の毛が禿げかかった小柄な男が、女に抱きつかれていても顔色一つ変えない大男に、甲高い声で話し掛けた。

お頭と呼ばれた大男は大様に頷くと、女の頭に手を置いて野太い声で言った。

「姫様の為だ。それ以外の理由じゃあ、動かん」

「ありがとう、ダーリン」

姫様と呼ばれた金髪金眼の女はそう言ってギュツとお頭に抱きついた。

この時にお頭の顔が朱に染まったと分かったのは、小柄な男だけだった。

「そんなのじゃ足りない。もっと」

姫様がダダをこね、それに大様にお頭が頷き、小柄な男が手下に指示を出す。

無事洞窟の最奥に財宝を見つけた一味は、それを外の馬車に運んでいるのだ。

小柄な男はどこか不審に思いながらも、忠誠を誓ったお頭の思っている通りの働きをしている。

「これで全部でっせ、お頭」

「ご苦労だったな。それではアジトに戻るか」

「早く戻る」

ダダをこねる姫様をあやししながら、一味はアジトに戻っていった。

近海の洞窟は大陸南西部の海岸線に存在する、国内でも有数の広さを誇る洞窟だ。

私がこの洞窟に興味を覚えた切欠は、ある村の伝承を聞いた時だ。近くの村の伝承によると近海の洞窟は、金塊の洞窟、あるいは禁解の洞窟と書く事があったという。（以後、本書では基本的に近海の洞窟で統一する。）

洞窟の最奥には金塊が眠っており、その金塊の所有者だった少女が封印されているから禁解なのだそうだ。

昔、ある盗賊一味がその金塊を全て持って行ったそうだ。すると、その金塊が美女美少女に化けて一味を懲らしめ、いつの間にか金塊は洞窟に戻っていた、というのが伝承の粗筋だ。

（後略）

0072 冗談なのにね。

「冗談なのにね。クスッ」

「……って冗談なのかよ」

はあ。

俺は一人、溜め息を吐いた。

自分の顔がほてっていることに気付いて、恥ずかしくなる。

「当たり前でしょ？ 何であなたを家に誘わないといけないのよ」
「……」

知りませんし知りたくもありません。ていうかそつちから誘って来たんだよね。

とは言わないで、心の中に留めた。

高校に入学してはや三ヶ月。偶々クラスが同じで席が隣同士というだけの関係だったはずの俺と彼女は、終業式を終えて何故か一緒に帰宅していた。

容姿端麗頭脳明晰運動神経抜群唯我独尊という天才とも完璧とも言える彼女が俺の隣を歩いている。

そもそものきっかけは……いや止めておこう更に気が滅入る。

「それにしてもつまらないわね、あなたって」

「悪かったな」

溜め息を一つ。

彼女は長い髪を揺らして、言葉とは裏腹に全くつまらなそうに見えない。

「ねえ」

突然足を止めた彼女が、俺に背を向けたまま小さな声で言った。
俺も足を止めて、その背中に聞く。

「何だ？」

「……………」

カラスが頭上を通り過ぎ、何人か同じ制服を着た生徒が通り過ぎた頃、彼女はようやく話し始める。

「もしもさ、もしもだよ。私が、その、さ。……………」

「何だよ、はつきりしろよ」

「うん」

彼女は一つ頷いた。

「……………私が、異世界人だつて言つたら、あなた、信じる？」

「……………は？ そんなわけないだろ。異世界なんて……………。冗談、だろ？」

彼女はまたクスツと笑った、ような気がした。

何も言わずに歩き出す彼女に気付いたのは、大分その姿が小さく
なつてからだった。

慌てて追い掛けて、肩に手を置いた。声を掛けたのは、何と無く、
泣いているような気がしたから。前にも同じような事があつたから。

「大丈夫だ。俺は君の……………」

言おうと思つた言葉は、突然の物凄い光によって遮られた。

しばらく経って光が収まり目を開けた。

「……は？」

俺が口にできたのはそれだけだった。

眼前に広がる中世の街並み。そして遠くにそびえる絢爛豪華なお城。

隣に立つ彼女はいつの間にか白いドレスを着込み、俺を見てこう告げた。

「ようこそ、勇者殿」

今度こそ、冗談なのにね、と言って欲しかった。

0073 今嘘言えば 騙されてあげるよ。

「今嘘言えば、騙されてあげるよ。」

その言葉は死刑宣告なのだろう。僕に嘘を言え、という。
愛憎。

愛と憎しみは紙一重と言うが、まさかここまでだったとは思わなかった。

きっかけ、と言えるのかは分からないが多分、一日前の昼食後の事が全てのきっかけになったのだと思う。

「ねえ、大事な話があるの。屋上で待っていてくれる？」

僕は特に何を考えるでもなく頷いた。

時計は午後の授業まであと30分の所をさして、時間には大分余裕があった。

白い雲が空の半分を覆い隠していた。

屋上にはまだ彼女の姿は無く、誰もいない閑散とした光景だけがそこにあった。

勝手に閉まることない扉を半開きにしたまま柵の近くまで歩くと、後ろから声をかけられた。

「ねえ」

振り返ると、扉の更の上の屋根に女子が腰掛けていた。
彼女は足で軽く勢いを付けて飛び降り、少しバランスを崩しながらも無事に着地した。

「ちようだい」

そしてそう言って差し出された左手。

僕は訳も分からずに戸惑っていると、彼女は無理矢理僕の右手を取って抱きついてきた。

その口元から覗く可愛い二本の八重歯を見せ付けながら。

バタンッ

その音が扉が閉まった音だという事に、暫く経ってから気付いた。
慌てて顔を向けたがそこには誰もいなかった。多分、いや間違いなく彼女だろう。

「ちよっと、もういいかな」

そういつて体を離すと、彼女は口元から垂れそうになる赤い液体を舐めとり、残念そうにうつむいた。

貧血気味でだるくなった体を何とか動かし、その場に彼女を残して校舎内に戻った。

「また、くるから」

そう最後に声をかけて。

その日はそれ以降、彼女から会話を拒絶されて、本当の事を話す
ことができなかった。

そして次の日。

約束をしてしまった手前、また屋上にやってきた僕は、しかし尾
行をしていた彼女に捕まり、昨日の彼女を横目に説明を求められた
のだ。

「信じてくれなくてもいいよ。彼女は」

そうして僕は本当の事を話し始めた。

だがその内に彼女の口元がひくつき始める。

そして話し終わると、ついに彼女は笑いだした。

「ちょ、ちょっと、嘘にも程っていうものがあるわよ、程っていう
ものが」

そんな彼女の様子に少しほっとした。

0074この声が掠れるまで 君を呼ぶよ

冷たい風に傷付いた体が強く押されて俺は膝から崩れ落ち、瓦礫の上につつ伏せに倒れこんだ。

力を振り絞り顔を上げるが、そこに広がるのはただ灰色の世界のみ。

誰かがいる気配もない。

「……なん、で？」

呟く言葉に答える人もおらず、ただ事実だけが晒される。

彼方で戦闘をしている音が聞こえる。だが、その音は直ぐに聞こえなくなった。

敵うはずがない。

学園一位のこの俺が敗けたのだから。

遠くに学園の時計台が見えた。

え？

敵は学園に

「っ」

あいつはあいつは、今朝笑顔で俺を送り出してくれたあいつは、まだ。

力を振り絞って立ち上がるつもりだが、全身が鉛のように重くなっている立っことは叶わなかった。

「うおおおっ！」

気合いを入れて腕を前に出し、体を前に移動させる。

0075 忘れないよ きっと ずっと

「み」

瓦礫の山を越えあいつの名前を呼ぼうとした。

だが無秩序に崩壊したはずの建物は、鋭利な刃物で切られたかのような綺麗な断面のみのブロックの山になっていた。

つまり、誰かが建物をまるごと切り刻んだということ。

中にいた人は誰一人として生き残ってはいないということ。

あいつは敵を倒すはずだった俺を見送った。

「いつてらっしやい」

信頼してくれた、俺が敵を倒して帰ってくると。

「私はここで待ってるから」

だが俺は

敵が近くに来ていると気付いたのは、刃物が首もとに当てられてからだった。

この刃物で建物を秩序に破壊したのだ。俺の首など、一瞬で切られる。

だがそれでもいいと思った。

もう、あいつはここにはいないのだから。

「忘れないよ」

最初それは風の音だと思った。

だが、いつの間にか離された刃物に気付いて後ろを振り返ると、敵はうつ向いたまま刃物をおろしている所だった。

「きつと」

言葉に引き寄せられ、離れている敵との距離を縮める。

最後の言葉は自分に委ねられた事に気付いた。

俺は迷わずに言う。

「ずっと」

敵はうつすらと微笑み、そして自らの胸に刃物を当てた。

俺はそれを押し通し、敵を抱き締めた。

今までの沢山の過去が俺を通り過ぎ、その中に自分の過去が加わる。

抱いていたはずの敵の姿はもうどこにも無く、俺はただ一人瓦礫の上に立っていた。

そして俺はまた哀しい過去を紡ぐ。

0076 甘い甘い恋の歌

人、人、人。

国立総合学校から今日、初等院から上等院までのおよそ一万人が卒業した。

長時間の卒業式だったためすでに日は傾いており、陽が地平線から顔を覗かせようとしている。灯境ひきょうと呼ばれる、二つの陽日がほぼ180度に位置するというこの季節特有の自然現象で、入学の季節までは晴れていれば毎日見ることができる。

左右から射し込む入日と出陽が世界を赤く染めあげ、仄暗い空と淡く光る地が対照的な雰囲気醸し出す。

敷地内の一画、緑の芝が黄色く光る広場に一人の制服を着た少女が凜と立っていた。

身長は120cm程と小さく、金髪は地面に付くかという位に長い。その表情は、緊張と悲しみと喜びが少しずつ混ざりあったように見える。

風が吹き、髪がなびく。

どこからか運ばれてきた桜の花びらが辺りを舞い踊り、芳かぐわしい匂いを運んできた。

「
」

少女はゆっくりと息を吸い、その倍の時間をかけて更にゆっくりと吐き出す。

そして目を閉じ、耳を澄ます。

鳥のさえずりや人々の声に溶け込んだある独特の音を感じ、その音に併せてそつと息を吸い、吐き出した。

少女が何度か同じ事を繰り返す内に、吐息は音になり詩になり、

そして心を震わせた。

甘い、甘い恋の歌。

詩が聴こえない、否、音すら聴こえない筈だが、その吐息は聴いた者にそんな印象を与え。

昔の初恋、今の興奮、そして未来の幸福。

そんな様々なことを思い出していた。

日が沈み切り、陽だけが世界を照らし始める。

聴こえなくなった音に気付いた人は、しかし特に気にすることも無かった。

少女はそつと微笑み、おまけとばかりに息を吹き出した。

それは風となり、何処までも翔んでいった。

0077君には笑顔が似合うから

「どうしたの？」

公園で見つけた女の子。

ボクはおつかいに行くところだったんだけど、気になって声をかけたんだ。

「ぐすっ……うっ……」

でも女の子は泣いてばかりで、答えてはくれなかった。

しかたなくポケットの中のアメをあげたんだ。お母さんが、困ったときの魔法のアメって言ってたから。

「アメ、どうぞ」

「ぐすっ……うえ？　くれるの？」

「うん」

そういうと女の子はきれいにアメを取りだして、まっかなそれを小さな口に入れたんだ。

「しゅっぱい！」

「うん、イチゴとウメのアメだから」

「イチゴっ」

「そう。おいしいでしょ」

何どかアメを口の中で転がした女の子は、笑顔でうなずいた。

「うんっ」

あれからもう五年。

中学生となった僕たちは、その公園のベンチに腰かけていた。

「懐かしいね」

「ああ」

ゴソゴソとポケットをまさぐり、真赤なアメを取り出した。

「それって、あのイチゴとウメのアメ？」

「そう。お母さんの手作りなんだって」

「へー」

二つの内の一つを彼女に渡した。

変わらない包み紙から出したアメを口に入れると、独特の酸っぱさと甘さが混ざりあった味がする。

「おいしい」

「うん」

沈黙が続くが、それほど居心地は悪くなかった。

「……まだあの時の包み紙、とってあるんだ」

「そうなんだ」

「うん……またこうして会えるなんて思ってたから」

少し顔を赤くした彼女を見て、僕の心臓が高鳴った。

「どっしり」

そう言っていると彼女は僕の顔を見て続ける。

「どうしてあの時、声をかけたの？」

僕は彼女を見返して、気恥ずかしくて視線を少し逸らしてから答えた。

「君には笑顔が似合うから、ね」

0078この胸にある 溢れるほどの気持ちを君に伝えたいのに

「この胸にある、溢れるほどの気持ちを君に伝えたいのに」

パカパッパパー

呟いた途端どこからか聞こえてきたラツパの間抜けなファンファ
ーレに、足を止めた。

いや、止めざるを得なかった、と言っべきか。

「おめでとうございます、あなたのその願い事はお願い番号第77
7番に登録されました、つまり無条件でそのお願い事を天使である
私が叶えてさしあげます、さて準備はよろしいですかよろしいです
ね、それでは早速1・2・3で完成です、良かったですねそれでは
失礼しますさようなrrrあつて何するんですか人がじゃなかった
天使が折角キャンペーンの貴方の権利と私の義務を一石二鳥で果た
したというのにまだ何か不満でもあるんですかこの下郎が」

明らかに義務しか果たすつもりのないガトリングトーク天使の白
くて細い腕を掴んで逃がさないようにする。

ついでに睨む。

「何か文句があるなら言いなさいよ、ただししっかりと聞き流して
あげるから感謝しなさい」

「スキだ」

「……………」

「……………」

「……………え？」

「じゃあな」

そう言って、逃げるように駆け出した。

「恥ずいぜ」

「何でこんなことになってるんだガトリング Took 天使の野郎よし
つかりと説明してくれるんだろうなえ？ 償えよ、体でもなんでも
持ってたんだろうえ？」

「否礼耳嫌弥厭、是んなのは想定外の内の外、天使の私も吃驚仰天
阿鼻叫喚の魑魅魍魎、有象無象の曖昧模糊な五臟六腑、空前絶後の
喧々諤々喧々囂々、騷乱動乱混乱反乱擾乱戦乱兵乱攪乱壊乱攪乱錯
乱散乱大乱淫乱変乱外乱内乱狂乱、姦しいとは将に此の事もう奇想
天外意味不明、五里霧中で一騎当千が三々五々点在散在混在存在、
ダブル立直一発門前清自摸和ドラ三断ヤオ九清一色三暗刻数え役満
又は字一色の大三元の四暗刻の天和フォータイムス役満並の驚きが
一生懸命一所懸命に濃縮凝縮圧縮されて一朝一夕に寄贈贈呈提供さ
れた気分を割分厘毛糸忽微纖沙塵挨渺模糊逡巡須臾瞬息弾指刹那
六徳虚空清浄阿頼耶阿摩羅涅槃寂靜単位の 的な感じにしてみた感
じ？」

「訳分かんねえっていうかそのどこの状況を表してるんだよ
っ！！」

説明しよう。彼は現在大勢の人に囲まれているのだ。天使の能力
により胸に溜った想い この場合はなぜか人なのだが が現在
現実現行現世現場に現れたのだ。説明終わり。

「何で人？」

説明しよう。天使が馬鹿だからだ。説明終わり。

「なるほど」

「馬鹿言うな納得するな誰か助けて圧死よ圧死っていうあんたがどうにかしなさいよ創造主でしょ」

「どうにか出来るんだったらやってるはこの馬鹿天使、そもそも何だよ777番って人気ないのかよ」

「無いわよ悪い？」

「悪くない好きだ」

「……………は？」

0078この胸にある 溢れるほどの気持ちを君に伝えたいのに(後書き)

天使の漢字が多い台詞の読み。

前半は四字熟語中心、中盤は麻雀の役の名前、後半は小さい単位です。

「否礼耳嫌弥厭、是んなのは想定外の内の外、天使の私も吃驚仰天
阿鼻叫喚の魑魅魍魎、有象無象の曖昧模糊な五臟六腑、空前絶後の
喧々諤々喧々囂々、騷乱動乱混乱乱反乱擾乱乱戦乱攪乱乱攪乱錯
乱散乱大乱淫乱变乱外乱内乱狂乱、姦しいとは将に此の事もう奇想
天外意味不明、五里霧中で一騎当干が三々五々点在散在混在存在、
ダブル立直一発門前清自摸和ドラ三断ヤオ九清一色三暗刻数え役満
又は字一色の大三元の四暗刻の天和フォータイトムス役満並の驚きが
一生懸命一所懸命に濃縮凝縮圧縮されて一朝一夕に寄贈贈呈提供さ
れた気分を割分厘毛糸忽微纖沙塵挨渺漠模糊逡巡須臾瞬息弹指刹那
六徳虚空清浄阿頼耶阿摩羅涅槃寂靜単位の 的な感じにしてみた感
じ?」

0079 悪夢を見た夜は 早く君に会いたくなるんだ

「悪夢を見た夜は早く君に会いたくなるんだー」

「へー、そうなんだ」

「うん、そうなの」

「こんな風に？」

「えっ？ きゃああああー！！！！」

ガバツ

「はあはあはあ……。何なのよ、今の夢は」

いつも通りの起床の風景はいつもよりも現実感が希薄で、そっと左手でシーツを握りこんだ。

淡い色のカーテンから射し込む光が、ゆっくりと私を現実に引き戻してくれた。

深呼吸をして時計を確認した頃には既に夢のことなど忘れていて、今日ある試験に意識が移っていた。

「朝食だ」

独り暮らしのアパートを出て電車を二回乗り継ぐこと30分、私の通う大学に到着する。

私立の文系大学はだいたい同じだと思うが、明るく個性的な人が多い。（理系大学だと暗くて個性的、だ）

「ここも同様で、こうして敷地を歩くだけで笑顔になれる。」

「よっ」

突然背中を押されてたたらを踏んだ。

後ろを振り向くと、長身で爽やかな顔を黒縁の分厚い眼鏡で台無しにする男が笑って立っていた。

「おはよ」

軽く手をあげて挨拶をすると、男は横に並んで歩き出した。

「今日の試験、どんな感じだ？」

「ん〜、まあまあかな」

「お前の言うまあまあは満点取れるっていう事だろ」

「そんなことないよ。ケアレスミスとかするし」

そう言つと、男は溜め息を吐いた。

「お前な、それってケアレスミスしなければ満点取れるっていう事だぞ」

「うん、そうだけど？」

授業をちゃんと受けていれば、それくらい簡単だと思うけど。

「はあ。ま、お前はそんなやつだよな。所でさ、眠れなくなる時ってあるか？」

「どうしたの、急に」

「いや、特に意味は無いさ」

「そう」

眠れなくなる時か。
不眠症とか精神的にハイになってるとかかな。
あとは、

『悪夢』

「えっ？」

男を見たが、彼は顔に疑問符を浮かべるだけだ。

「ううん、なんでもない」

「へー、そうなんだ」

彼の言葉に頷いて前を向いた。

だが何か引掛かり、もう一度彼を見る。
すると何故か彼は極上の笑みを浮かべており

0080 君がいないと何も出来ない僕だから

君がいないと何も出来ない僕だから

いても何も出来ないじゃん

「なに書いてんの？ また小説？」

「うん。まだ何となくだけど」

「好きねえ」

この子は私の従弟。

昔から本を読むのが好きで、なのに目が見えなくて許せなかったりする。

最近では自分で小説を書き始めて、どこかのインターネットで公開しているらしい。

教えてはくれなかった。

「どんななの？ 見せて」

「あつ、ちよつとお姉ちゃん、勝手に見ないでよ」

「いいじゃんいいじゃん、別に減るものでもないんだし」

「減ります！ どうせご近所の人達に言いふらすんでしょ。特に僕のプライドが減るんだよ」

こんな女の子のような顔をして、僕。

眼鏡っ子だったら最高だったけど、伊達ですらかけてくれない。

この前寝ている間に眼鏡をかけて写真に撮ったけど、やっぱり制服がよかった。
そうだ。

「ねえ、それなら制服を着てきてくれない？」

「何でだよ」

「嫌ならそれ、力づくでも読むから」

「……………はあ、わかったよ」

溜め息を吐きつつ、渋々といった様子で二階に上がっていったけど、下りてくる時の表情が楽しみね。

実は部屋には女の子用の可愛い制服しか置いていない。さっきこっそり私の昔のを置いて、弟を私の部屋のタンスの奥にしまったのだ。

もうそろそろ着替え終わった所かな。

「お姉ちゃん何これっ！！」

ふふっ、怒るのも想定済み。

「早く着替えてきてくれないと、夕飯作らないよ？」

そう言つと諦めたのか声は聞こえなくなった。
だけど、しばらくして。

「どうせ僕にこんな服を着せても、夕飯は僕が作ることになるんでしょ」

ばれてたか。

0081君が思ってるよりも 僕は君を想っているんだよ

用件の1、3日午前7時、録音時間5秒です

『君が思ってるよりも 僕は君を想っているんだよ』

用件の2、3日午前7時30分、録音時間5秒です

『君が思ってるよりも 僕は君を想っているんだよ』

用件の3、3日午前8時、録音時間5秒です

『君が思ってるよりも 僕は君を想っているんだよ』

用件の4、3日午前8時30分、録音時間5秒です

『君が思ってるよりも 僕は君を想っているんだよ』

用件の5、3日午前9時、録音時間5秒です

『君が思ってるよりも 僕は君を想っているんだよ』

用件の6、3日午前9時30分、録音時間5秒です

『君が思ってるよりも 僕は君を想っているんだよ』

用件の7、3日午前10時、録音時間5秒です

『君が思ってるよりも 僕は君を想っているんだよ』

用件の8、3日午前10時30分、録音時間5秒です

『君が思ってるよりも 僕は君を想っているんだよ』

用件の9、3日午前11時、録音時間5秒です

『君が思ってるよりも 僕は君を想っているんだよ』

用件の10、3日午前11時30分、録音時間5秒です

『君が思ってるよりも 僕は君を想っているんだよ』

用件の11、3日午後0時、録音時間5秒です

『君が思ってるよりも 僕は君を想っているんだよ』

用件の12、3日午後0時30分、録音時間5秒です

『君が思ってるよりも 僕は君を想っているんだよ』

用件の13、3日午後1時、録音時間5秒です

『君が思ってるよりも 僕は君を想っているんだよ』

用件の14、3日午後1時30分、録音時間5秒です

『君が思ってるよりも 僕は君を想っているんだよ』

用件の15、3日午後2時、録音時間5秒です

『君が思ってるよりも 僕は君を想っているんだよ』

用件の16、3日午後2時30分、録音時間5秒です

『君が思ってるよりも 僕は君を想っているんだよ』

用件の17、3日午後3時、録音時間5秒です

『君が思ってるよりも 僕は君を想っているんだよ』

用件の18、3日午後3時30分、録音時間5秒です

『君が思ってるよりも 僕は君を想っているんだよ』

用件の19、3日午後4時、録音時間5秒です

『君が思ってるよりも 僕は君を想っているんだよ』

用件の20、3日午後4時30分、録音時間5秒です

『君が思ってるよりも 僕は君を想っているんだよ』

0082 気にしないで そのままの君が好きなんだから

時は1999年。

未だに貴族制度の存在するこの世界。批判的な啓蒙的な考え方の政治がようやく叫ばれ始めた時代。幾つかの大国と、その何れかの属国となっているあまたの小国が存在し、その全ては大きな一つの大陸に存在している。実はもう一つの大陸が存在するのだが、互いに互いを発見した事は無い。大陸の地形は少々歪んだ正方形をしている。便宜上、各々の頂点を東西南北と呼ぶことにするが、そういった概念はまだはつきりとした形では存在していない。北方の国は年中（年という時間は厳密には此方の世界での半年程になる）寒冷で、主に鉱石や加工、機械（電子機器の事ではない）工業が発達している。東方は肥沃な平地が広がり、農業や牧畜が盛んだ。西方は乾燥地帯が殆んどを占め、年中強い風が吹いている為、幾ばくかの遊牧民が点在するのみである。南方には海岸線が広がり、貴重な塩が取れる為か商業が発達している。

そんな世界のとある国のとある王都で起こったとある物語。

「気にしないで。そのままの君が好きなんだから」

そう言ったのは物語の舞台となる国の第二王子。場所は豪華な城に程近い場所にある邸宅の二階の、天蓋付きベッドや化粧棚、本棚にティーセットと、全体が淡い乙女チックに統一された部屋だ。

「大丈夫。明日もまた来るから」

そう言う王子の腕の中にいる部屋の主は、煌びやかなドレスを着ている。長い金色の髪の毛に真ん丸で真っ青な瞳。よく見ると、その片方は赤みがかっており、所謂オッドアイになっている。

「僕だって君とずっと一緒にいたいよ」

身動き一つしない主を、王子は更に抱きすくめる。

「でも、父様が許してはくれないんだ」

しばらくの間そうしていると、扉がノックされた。向こう側から控え目な声がする。

「王子様、そろそろお時間になります」

「そっ」

たった一字だけ言葉を発した王子は、その手に持っていた豪華な人形をベッドにそっと寝かせると、一言声をかけて部屋を出ていった。

「また来るからね」

扉を開けて外に出ると、そこは真っ黒だった。

当然だ。そこまで設定はしていないし、したとしても余り意味がない。

Googleを外すと、モニタにはいつもの文句が表示されていた。

『ご利用 ありがとうございます』

またのお越しを お待ちしております』

0083 過去は振り返らないって決めたの

「過去は振り返らないって決めたの!!」

そう怒鳴りつけられた僕は、その手に持っているものの赤い字を見て全てを理解した。

「あのね、流石に赤点取ったら反省してほしいな」

「いいのよ。どうせ変えられないんだし」

「そりゃそうだけどね、いくらなんでも限度っていうものが」

「大丈夫よ」

そう言っって微笑んだ双子の姉は、廊下にも聞こえるのではないかという位の大音量で言った。

「これが運命ですもの!!」

「違うからっ!!」

僕はすぐさま否定をした。

しばらく睨みあっていたが、姉はプイッと顔を背けると教室を出ていった。

「はあ」

屋上に向かうと案の定姉はそこにいた。

「遅いっ!!」

「開口一番がそれっ!?!」

「細かいことは気にしないの。モテないぞ」
「ハードル高いよ、それ」

これでも5分しか経っていないはずだ。普通に考えて、そんなに早く見付けられるとは思えないのだが。

「はあ。まあいいや。それじゃあ補講に向けて、放課後は勉強しないとね」

「そ、それって」

「うん、今日は寝かさないよ」
「……」

急に黙りこんだ姉に、僕は訝しげな視線を送った。
顔を紅くして、身悶える姉。

「弟と二人、一つの部屋で近親そ」

「わーーーーー!!!」

「何よ」

「言っちゃ駄目。絶対、駄目!」

睨みあっていた僕たちだったが、先に姉が折れてくれた。

「分かったわよ。はあ、こんなことになるんだったら、ちゃんと勉強しておくんだった」

「そうだよ」

「そうしたらご褒美に近親そ」

「わーーーーー!!!」

0084君に近づいたときに どれだけ僕が汚いかを思い知らされる(前書き)

少々残酷な表現があります。

0084君に近づいた時に どれだけ僕が汚いかを思い知らされる

そこは、黒い部屋だった。壁も床も天井も扉も窓も窓の外も、光でさえ黒かった。

自分がどうしてここにいるのかが分からない。ただ、持っているものは今着ている服だけで、彼女に会いに来たんだという事だけは覚えている。

そう、彼女に会うために。

どうやら自分はずぶ濡れのようにだ。足を前に出すたびに水の音がする。

ふと、疑問に思う。

どうして真つ暗なのに窓が見えたんだろう。

正面に顔を向けると、いつの間にか扉が開いていた。その向こうから、淡く白い光が射し込んできた。

扉を抜けると、そこはさっきと同じ様な部屋だった。違うのは、色が全て仄かに白っぽくなった事と、彼女にほんの少しだけ近付いたという事。

それでも真つ暗な事には違いがなく、正面から淡い光が射し込んでいる事にはすぐ気が付いた。

僅かに躊躇ったが、しかし先に進んだ。

徐々に明るくなっているらしい部屋。

それに従って、自分の姿が浮かび上がってきた。

身体中に乾ききつていない泥を被り、洋服の様なものを着てはいるがそれは所々で切り裂かれている。

肩下まで伸びた髪と髭は四方八方に跳ねまわり、手足の爪は大分伸びていた。

自分は、汚れている。

容姿だけではない。心もそうだった。

殴りたい、倒したい、斬りたい、潰したい、犯したい、殺したい、まだ満足できない。

もっとだ、もっと。

底無しの、汚れた欲望だった。

彼女がいたのは真っ白な、そう、曇のない部屋だった。ただ一つ、自分を除いて。

「おかえり」

彼女が呟いた。

自分は首を傾げる。

「おかえり」

彼女はもう一度言った。今度は少しだけ大きな声だった。自分は

「おかえり」

あとずさった。一步。

彼女はそれに併せるかのように一步前が出る。

自分はまたあとずさった。

彼女が一步前に入る。

あとずさる。

前に入る。

あとずさる。

前に入る。

何度か繰り返すと、彼女の足が泥で黒く染まった。

自分は恐怖の目で彼女を見る。

だが彼女は笑顔のまま更に前に出た。

更に彼女は黒く染まる。

彼女は一步、また一步と近付きながら、己を黒く染めていく。

自分は動くことができなかった。

「おかえり」

自分は

0085 真つ白な君

「はわわっ」

ぼふつと音をたてて、ずっこけた。その顔に当たる部分には何故か小麦粉の目一杯入ったボールがおりてあり、どうやらそれが鳴ったらしい。

「けほっ、けほっ。まあ、何するのだ」

「悪い。わざとじゃ無いぜ」

「む」

まあ、俺がおいたんだがな。

可愛く睨みつけてくる従姉妹の頭を撫で撫でしながら周りを窺った。どうやら気付かれてはいないようだ。

「ほら、さっさと顔拭け。先進むぞ」

「あ、待ってよ」

「兄様が探してたのって、あれ？」

「そうだ」

今俺たちは岩場の影に隠れて、ダチヨウのような鳥がいる巣を見ている。

「あの鳥の足元に、卵があるだろ」

「うん」

「あれが目的だ」
「……………」

突然黙りこんだ従姉妹に視線を戻す。

「どうした？」

「……………なんでもない」

「顔色が悪」

「何でもないのだ。早く取る」

「ああ」

まだこちらに気付いていないらしい鳥に一気に近付く。
あと三步、という所で鳥はこちらを振り向いた。

「クワアアアアア！！」

「うりゃああああ！！」

そして俺の放った渾身の拳は、その一見柔らかそうな翼によって
あっさりと防がれた。

だが俺は更に打撃を加える。

「うららららららららら」

「クワワワワワワワ」

拳の一つ一つに反応し対応する鳥の素早さに驚いたが、しかし確
実にその速度は落ちてきている。

このままいけば必ず倒せる。

「はぁっ！！」

そう思った矢先、横から矢が飛んできた。
向かう先は翼が離れて無防備に晒された腹だ。

「クワ」

鳥は気付いたようだったが時既に遅く。
直後には横に倒れ、そして絶命した。

「やったのだ、兄様」

「ああ、そうだな」

矢を射た張本人の従姉妹が嬉しそうに駆け寄ってきた。
そして視線を卵に向ける。

「あれが、伝説の卵なのか？」

「恐らくな」

そつと二人でそれを持ち、帰宅した。

「やっぱりそうか~~~~~！」

「やっぱりってなんだよ」

「兄様が私に小麦粉を付けたことがずっと気になっていたのだ。それが、それが本当だったなんて」

「いや珍しいだろ、真っ白な黄身、なんてさ。滅多に食べられないぜ」

0086雨だね。そこで雨宿りがてら 何か飲む？

「止まないわね」

「ああ」

薄暗い喫茶店。

店内にはマスターと客が二人。窓から見える風景は、灰色い雨が降る静かなものだ。その雰囲気を変えない音楽がそつと店内に流れている。

マスターはしばらく前に客に珈琲を出した後、カウンターの裏で雑誌を読んでいる。

「彼女、大丈夫かしら」

「彼女？」

「ほら、この前話してた」

男は少し考えて、ああと納得する。

「昨日、会ったよ。再来月結婚するらしい」

「へー、そこまでいったんだ、あの二人。意外だな」

「だな。まあ、恋とか愛なんて、分からないもんだよな」

「何それ。口説いてるの」

「違う違う、一般論だよ。昨日まで見ず知らずだった人と急に結婚するっていつれ」

曲が変わる。

珈琲は半分ほどまで減っている。

「男はロマンチスト、よね」

「ん？」

「一般論よ。何でもないわ。それよりも企画、通りそう？」
「ああ、そうだな」

男は上げた視線をまた落とす。

女は珈琲をスプーンで意味なく掻き混ぜる。

「どうだろうな」

「厳しい」

「少し、な」

「そう。通るといいわね」

「ああ。そうだな」

窓の外はまだ雨が降っている。

「雨、か」

「ポエティー？」

「何だポエティーって」

「何か可愛らしい詩でも浮かんだのかと思って」

「何だそりゃ。どうしてそうなる」

「ロマンチストな男たちへ」

オペラのようにそう言った女はクスリと笑う。

男もつられて笑う。

「お前の方がロマンチストっぽいぞ」

「そうかしら」

「そうだよ」

珈琲を啜る。

「止まないわね」
「そっだな」

0087 少しでも休ませて 明日から頑張るから

ここは？

ソレは暗闇の中で首をかしげた。

崩壊した未来文明の残骸。それが、私の第一印象だった。

剥き出しのコンクリートや中途半端に割れたガラス、長い間使われてこなかったはずにもかかわらず妙な生活感の残る建物に、洗練された形の動かない機械たち。

どこか懐かしい気もしたが、それ以上に不気味さを漂わせた廃墟郡だった。

ソレが空気を振動させる。意味のない音は、なにも伝えてこない。

アナタは？

そう聞くと、ソレは嬉しそうにしながらどこかへ行ってしまった。
淡泊なモノだ。

風のない晴天の空から音がする。

ちよつと時代遅れの洗濯機が動いているような、スムーズな、しかし不安定な音だ。

少し歩くと発信源は直ぐに見付かった。それは、エスカレーターだった。

人もいないのに只管に動き続けている真っ黒なエスカレーター。数メートルの高さの所まで続いているらしい。その先には青空が見えた。

周りには動くものが一つもない。私とエスカレーター、それとソ

しただけだった。

好奇心に押され、エスカレーターに乗る。カタカタと音をたてながら私は持ち上げられていく。

と、突然、恐怖が全身を駆け抜けていった。えたいのしれない、何か見てはいけないモノがこの先にはある。そう直感した。

慌てたが、しかしエスカレーターは私に考える時間を与えてはくれなかった。

あ…… ああっ！

死ぬんだな。そう、私は理解した。

ソレは人だった。

黒と白の、モノクロ写真を切り出したかのような、日常の「コマ。

そんな人が視界一杯にあった。

携帯をいじっている人、何かに座っている人、怒鳴っている人、欠伸をしている人。どれもがモノクロ写真のようにそこにある。

そこまで認識して、そして私は

「おはよー」

「おはよ、何か今日はやけに元気ね。いい人でも見付かった？」

「ち、違うよー。私には」

「好きな人がいるもんね」

「ちよつと！ そんなんじゃ」

「冗談だつて。で、何があつたの？」

「もう。よく分かんない。けど、何か頑張れそうな気がする」

「そっか、頑張れっ」

「うん」

0088お願いします。僕を君の傍にいさせてください。

よく、月や太陽は人に例えられる。

古代の太陽信仰といったものや神話にみられるような、人（あるいは神）の一種と捉えたもの。はたまた蝕を『食べる』とみたり、子どもが絵に顔を描いたりするような、それぞれのものが一種の生物と捉えたもの。

また、太陽と月は対を成すものとしてもよく認識されている。月食と日食や曜日などの暦の数え方、昼は太陽の、夜は月の支配する世界であったり、はたまた太陽暦と太陰暦のようにどちらかを優位とみることもある。かぐや姫は月に連れ去られ、イカロスは太陽に羽ばたいた。人のように捉えて、太陽の男神と月の女神の仲がよくなったり悪くなったり。

結局のところ何が言いたいのか、というと、太陽と月を観察する人間、ひいては地球が仲間外れだと思うのだ。いや、特別視ともいえるかもしれないが。

天動説と地動説、または天地人といったものから始まり、地球そのものを神とみた信仰にはなかなか出会えない。他にペアがいるわけでもなく、ただ観測地点というだけでひとりぼっちだ。月に最も近い星だというのに。

こんな話を聞いたことがある。地球と太陽と月の三角関係の話だ。この話では地球が男で太陽と月が女だったが。ああ、ここでも仲間外れなのか。

まあ、昼ドラのようにドロドロした話ではない。どちらかといえば、青春スポコンアニメといったところか。

ん？ 3号まである魔球の話や女の子という理由だけで涙が出るような話ではない。双子のつやつや兄弟の話が近いだろうか。いや、あれはスポコンか？

まあいい。閑話休題だ。

なんの話だったか。ああ、三つ子の話だったな。ん、違う？ 三角関係の話か。

そもそも話の始まりは太陽の嫉妬だったんだな。いや、違うか。月と地球が付き合い始めたことか？ まあ始まりなんてどこでもいいんだが、とにかく月と地球が付き合っている所をみて、太陽が嫉妬したんだ。

仲睦まじい月と地球。地球に恋心を抱く太陽。落とし所っていうとなんだか現実的だが、そんな所が無いかと考えた。それが今の状況らしい。

ん？ どんな状況かって？

それくらい考える。結局、人間も星も同じ存在なんだから。

でもそう考えると、太陽って逆ハ―状態？

0089 貴方に触れられるなら どんな罰でも受けるよ。

カリカリカリカリ

薄暗い部屋にはただペンが紙を擦る音だけが響いている。

燭台にあったはずのロウソクの姿はそこにはなく、ただ黒焦げた何か風が飛ばされまいとしがみついている。

部屋の主らしい男の髪と髭はこれでもかという程に伸び、僅かに表れる肌は黒く何日も風呂に入っていないことがうかがえる。

カリカリカリカリ

ペンの動きが止まることはなく、ペンを紙から離れた一瞬だけが静寂だ。

男は手だけでなく口も動かしていたが、もはやそこから音は出ない。

あ、お、い。口の形はこの三つが繰り返されていて、元々は誰かの名前だったのかもしれない。

カリカリカリカリ

髪の間から覗く目は充血しており、瞼が閉じられることはない。よく見ると体は痩せ細り、まともな食事を何日もしていないように感じられる。

布のような端切れが過去の彼を物語るように、否、彼を過去に縛り付けるように体にかかっている。

カリカリカリカリ

最早、彼の頭には何のためにこんなことをするのかすら残っていない。

ただそれしか出来ないから、ただ何も出来ないはずだったから、ただ望んだから、ただ望まれたから。

ただただ彼はペンを動かす。

カリカリカリカリ

インクが無くなることはない。

ペンが壊れることはない。

紙が減ることはない。

カリカリカリカリ

刹那すら永遠になる地獄のような世界で、彼は書き続ける。

目的も欲望もなく。

そこに在り続ける限り、ただ只管に。

カリカリカリカリ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9555h/>

名前の無い小説群

2011年10月5日00時43分発行